平成 25 年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践ー

神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
三國　隆志

神奈川県立国際言語文化アカデミアが開所して一年を経たとき、開所一周年を記念して、ひとつの国の文化に焦点をあてたイベントを開催しました。「アルゼンチン・デイ」と名づけられたこのイベントでは、広くこの国の芸術に関する講演からワインの試飲、アルゼンチン・タンゴの実演まで行いました。アルゼンチン共和国のラウル・デジャン駐日大使御夫妻も出席してくださり、懇切な挨拶をいただきました。

日本人の中には、ともすれば英米志向、ヨーロッパ志向が強くて、アジアや南米の国々の言語と文化に取り組むことが後回しになりがちな人がいます。いま神奈川県に幅広い国際性が強く感じられるのは、戦後初代の神奈川県知事である内山岩太郎の尽力によるところが大きいと思います。戦前にアルゼンチン公使を勤め、敗戦後は引退生活を送っておりましたが、吉田茂が彼を神奈川県知事に指名しました。スペイン語、フランス語、英語を自由に駆使して外交官としての才能を知事の仕事に活かし、その能力をいかんなく発揮されただけでなく、何よりも狭いナショナリズムにとらわれない精神の自由を発揮されたことが、新鮮な輝きを放っています。戦後、焼け跡でしかなかった荒廃した神奈川県の復興に、二十一年にわたり知事として尽力し、神奈川県立図書館、音楽堂、神奈川県立近代美術館などの文化施設を完成させ、県立総合教育センター、神奈川県立貿易外語短大などの教育施設の構想も打ち出しました。戦後の財政窮乏の折にあっても、議会の反対の大合唱に対しては「人々が食うや食わずのこの時にこそ、文化の振興に力を注ぐべきと考える」と反論したのです。文化と教育に関する重要な事業は、どしどし推し進めていきました。エネルギーに溢れた、反骨の人物であり、愛国者であり国際人でありました。これは、外交官時代を過ごした南米諸国、特にアルゼンチンの文化の影響があるのではないかと思われます。

南米には、自由へのあこがれ、独立へのあこがれ、人間の心意気を大事にする気持ち、学問や芸術に対する大いなる尊敬の念がみられます。内山知事には、自由と独立と芸術を愛する、アルゼンチン的な気風があったと思います。この初代の神奈川県知事の国際性と外交感覚、島国根性のなさ、ここにアカデミアは神奈川県を代表する国際人の典型を見出し、その精神を次の世代につないでいきたいと思います。外国語教育はそのような国際的精神と共生感の基盤の上に成立すべきものです。いかに最新の教育技術や教授法が喧伝されようとも、手段が目的に堕さないよう心して、アカデミアの教員はこれからも真摯に研修事業に取り組んでいきたいと思います。

目　　次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは　1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト　3

「学習意欲」にかかわる指導
　英語が苦手な生徒の学習意欲向上を目指して　5

「文法」にかかわる指導
　言語活動につなげる文法指導　9

「語彙」にかかわる指導
　学習意欲と達成感を高める語彙指導　13

「論理的・批判的思考」にかかわる指導
　批判的に読み、論理的に伝える力を育む英語授業　17

「話すこと」にかかわる指導
　話すことに自信を持たせる「英語表現」の授業　21
　英文の内容理解に基づく会話活動　25

「読むこと」にかかわる指導
　生徒に達成感を与えるリーディングの授業　29
　スキーマを活用した読解・速読の指導　33
　英文の要旨と構造を読み取らせるリーディング指導　37
　学習意欲と達成感を高めるリーディングの授業　41

「書くこと」にかかわる指導
　ルーブリックを活用した自由英作文指導　45
　サマリーライティングを用いた技能統合型授業　49
　ルーブリックを活用したサマリーライティングの活動　53

＊それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し、県教育委員会との連携のもと、国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日、夏季4日、後期3日）、勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日、研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラムは、「英語教師の専門知識、英語による発信力」「授業研究、授業改善」「多文化共生、異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。

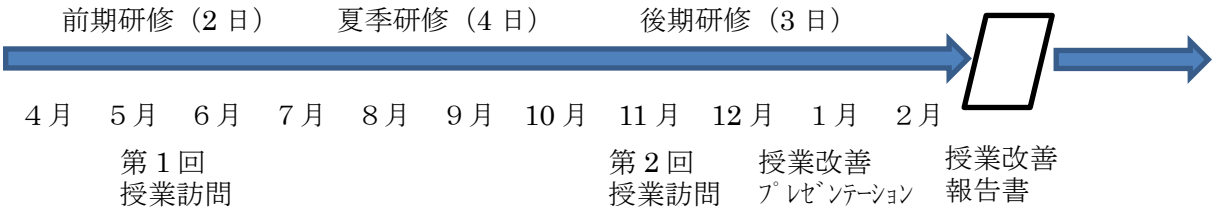
Objective 1	Objective 2	Objective 3
Expertise in English	Reflective Teaching	Multicultural Awareness
英語による発信力、及び英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。	自らの授業を客観的に分析し、他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。	英語教育において多文化共生、異文化コミュニケーションを扱うことの意義について意識を高める。

平成25年度までの3年間で、計47名の参加者が、高度な言語知識・技能及びそれらを基盤とした指導力を身につけ、仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく県内の各学校で活躍しています。

初年度のプログラム内容を基本としながら、平成25年度はディベートを活用した英語運用能力向上の試みをはじめ、省察による授業実践力向上、多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など、研修内容の改善と充実にも取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践、生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし、教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では、集合研修において多文化共生への意識、英語力、英語教育に関する専門知識を高めながら、勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 報告書が示す指導上のヒントと目標設定の大切さ

生徒の学習段階や習熟度、卒業後の進路を見据えた目標設定は授業の成否を左右します。今年度の報告書は、各学年での指導におけるヒントや目標設定の大切さについて多くの示唆を与えてくれます。

［１年生］

- 「コミュニケーション英語Ⅰ」では、音読と要約活動（口頭および筆記）を通し、英文の理解を深め、読む・聞く・話す・書く、の 4 技能を育てる授業が可能になる。
- 「英語表現Ⅰ」の授業では、書いた内容について話す活動を行うと、「話す内容に見通しがつく」ので、より活発に生徒が話す様子が見られる。

［２年生］

- 例文や画像提示の仕方の工夫により、語彙指導をより効果的に行うことができる。
- 英語が苦手な生徒に文法を理解させるには、例文の面白さや語彙レベルの調整、簡潔で納得のいく説明、段階を踏んだ十分な量の練習を行うことが必要だ。
- 話すこと、書くことの指導では、Rubric の活用やポートフォリオ評価が効果的だ。

［３年生］

- 入試の先を見据えた英語学習の目標共有、リーディングスキル、多様な話題についての背景知識や教師の体験談が、生徒の学習意欲の維持に役立つ。速読と精読の両方が必要。
- 文法や基本表現に慣れさせた上で話す活動をし、ALT とのやりとりの経験をさせることで、 生徒に自信をつけさせることができる。
- 授業の目標を生徒に提示することで、ポイントをしぼった授業ができる。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は 3 つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイディア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については将来的には厳密さを目指したいが、本報告ではあくまで授業改善の一助として位置づける。

本研修の実施及び本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

１．自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

２．授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

（例）英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。
音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

３．改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

４．生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

（質的データの例）生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

（数量的データの例）標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

５．改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安（数値目標）」として明確に言語化します。

６．目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

（例）新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば、記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

７．生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

８．報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します（研修最終日に英語による口頭発表も行います）。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ 過去 3 年間のテーマ

この 3 年間で受講者の先生方が取り組んできたテーマには、次のようなものがあります。

年度	テーマ	
平成23年度	生徒を振り向かせる言語活動と授業設計	意欲と自信を高めるリーディング指導
	ICT 活用による授業の活性化	速読力を高める基礎練習と読解タスク
	音読活動の工夫による授業の活性化	速読力向上を目指す語彙指導と読解指導
	家庭学習を促し、達成感を与える教材	長文読解のための学習方略の指導
	生徒の意欲と自信を向上させる音読指導	ルーブリックを用いた自由英作文指導
	e-learning による自律学習と協同学習	英作文の力を伸ばす英文日記の活用
	基本語彙定着のための基礎・応用練習	自由作文につながる文構造の段階的指導
	語彙定着を促す提示の工夫と覚え方の指導	段階的読解タスクと自己表現活動
	語彙力増強を目指した教材活用と言語活動	多様な言語活動による「英語で進める授業」
	読解力を伸ばすための言語活動	英問英答から始める、発話を促す授業
平成24年度	学習意欲の維持と基礎的な語彙力向上	論理展開を意識したリーディング指導
	「楽しい授業」「やる気が出る授業」の工夫	速読のための学習方略の指導
	動機づけを高める学習ストラテジーの指導	速読活動によるリーディング授業の改善
	生徒が学習しやすい語彙指導の工夫	ルーブリックを用いたライティング指導
	音読とディクテーションで伸ばす聞く力	生徒と教師がともに学ぶ自由作文の授業
	リズムを意識して読むための音声指導	読解力向上のための英文要約指導
	生徒を励ます長文読解指導	教科書読後の 5 文サマリー活動
平成25年度	英語が苦手な生徒の学習意欲向上	スキーマを活用した読解・速読の指導
	言語活動につなげる文法指導	要旨と構造にかかわるリーディング指導
	学習意欲と達成感を高める語彙指導	意欲と達成感を高めるリーディング授業
	批判的・論理的思考力を育む英語授業	ルーブリックを活用した自由英作文指導
	話すことに自信を持たせる授業	サマリーを用いた技能統合型授業
	英文の内容理解に基づく会話活動	ルーブリックを活用したサマリーの活動
	生徒に達成感を与えるリーディング授業	

英語が苦手な生徒の学習意欲向上を目指して

科目名	ライティング	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は習熟度別の基礎クラス（20 名）である。年度当初のクラスは昨年度の学年末試験（英語表現）の結果により決定し、今年度は定期試験をもとに 2 回、クラス替えを行った。対象クラスは、活気があり会話練習には積極的に参加するが、私語が多くなりがちである。学習意欲にはやや欠け、すぐに飽きてしまうところがある。ほぼ全員が漠然と進学を考えてはいるが、そのための準備はしていない生徒が大半である。

解決すべき課題

入学当時から継続して基礎クラスにいる生徒もおり、劣等感および「やっても無駄」というあきらめの気持ちが出てきている。それが学習意欲の低下につながり、さらに学力が下がるという負の連鎖が起きている。学習への不安を軽減するためにグループワークを取り入れてきたが、本当に個々の生徒が学習に自律的に取り組んでいるのかを確認しないまま続けてきた。生徒たちは楽しそうにやっており、表面的にはうまくいっているようだが、「楽しい」という意識が「グループでやることで楽ができる」「友だちと雑談ができる」という気持ちから来ているに過ぎず、このやり方が本当に生徒のためになっているのだろうかという疑念がわいてきた。

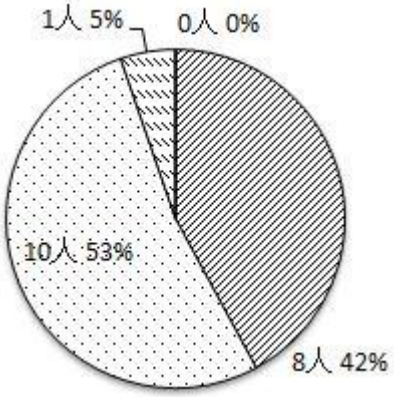
事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

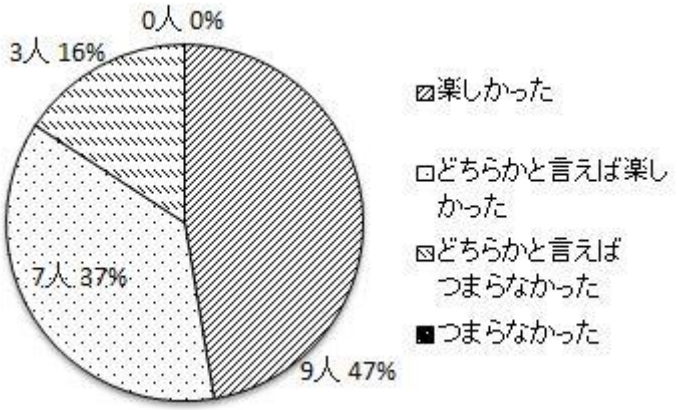
○ アンケート調査（８月：回答数 19 人）

４月当初から、活気はあるが集中力がとぎれやすかったため、グループワークを続けながら授業を行ってきた。クラス替え直前の８月に、「授業そのものの楽しさ」「グループワークの楽しさ」について、生徒たちの気持ちを確認するためにアンケートを実施した。

結果から、ほとんどすべての生徒が授業を「楽しい」と感じており、グループワークについては 8 割強が肯定的にとらえていることがあらためてわかった。「楽しい」という気持ちを保ちながら、グループワークを含む活動をより効果的なものに改善していかなければならないと思った。

① 授業は楽しかったか　　② グループワークは楽しかったか





○ 授業観察

グループワークの取組状況をあらためてじっくり観察してみると、やはり次のような問題点が見えてきた。

・グループによっては、問題への答えを聞かれた時に、特定の生徒に押しつける傾向がある。
・「やっても無理」と投げ出してしまう生徒がいる。
・「グループワーク＝無駄話をしていい時間」と考えている生徒が見られる。

○ 生徒の声

授業終了後や他の時間などにインフォーマルな形で、英語学習や授業に関して生徒と話してみると、次のような声が聞かれた。

・会話やゲームは好きだが、文法の勉強はきらい
・英語は苦手だけど本当はできるようになりたい
・授業は楽しいけど家で勉強はしたくない
・厳しい先生の授業は無理。本当に学校に来たくなくなる

ここからは「授業だけで、楽しみながら英語を身につけたい」という生徒の本音が見えてくる。また、多くの生徒が教師に対して、「ほめてほしい」「話を聞いてほしい」という気持ちを持っていることがうかがえた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

英語を苦手とする生徒の「授業が楽しい」という気持ちを維持しながら、個々の生徒が自律的に学習に取り組めるようにするにはどのような指導をしたらよいか。

改善の目安：学習活動の改善後も、英語の授業を楽しいと感じる生徒数の現状維持ができる。

改善のための手だて

○ 英語の授業に親しみやすく安心できる雰囲気を作り出せば、生徒は授業に集中しながら楽しく学習できるようになるだろう。

・教室内をこまめに巡回し一人ひとりへの声掛けを行う。

・生徒が興味を持つような話題を使って、説明に使う例文や作文課題を作る。

○ 適切な支援を行いながら、グループワークのなかにピア・ラーニングの要素を取り入れれば、達成感と自信を与えることができるだろう。

・グループワークのなかで、お互いに教え合うことにより、学習内容の定着を促し、「理解でき、人に教えることができた」という自信を持たせる。

・グループワークの取組状況をみながら、個々の生徒に助言や励ましを与え、できたことについて積極的にほめることで達成感を持たせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 夏休み後の生徒の様子

クラスの再編から１０月末の中間試験までの間に、次のような問題点が出てきた。

・クラス 20 名のうちの 4 名が入れ替わったが、新しい生徒は基礎クラスの授業の進め方になかなかなじめなかった。またやる気を出して授業の中心となってくれていた生徒の一部が発展クラスに移ってしまったため活気が少しなくなった。

・文化祭・修学旅行などの学校行事が続き、勉強に集中できない生徒が出てきた。

・後期第一中間試験がかなり難易度の高い内容だったため、基礎クラスの平均点は 25 点前後となり、生徒の自信や意欲が失われた。

・グループ内で特定の生徒に依存し、あまり活動しない生徒が出てきた。

○ 活動の改善

① グループワークにおける役割分担とペアワークの導入

・グループワークを行う時には、各自に役割（記録、発表など）を与えた。

・一人ひとりの発話機会を増やし、活動への参加を促すためにペアワークを多く取り入れた。

② 活動内容・進め方の工夫

・１つの活動にあまり時間をかけすぎず、飽きさせないようにした。

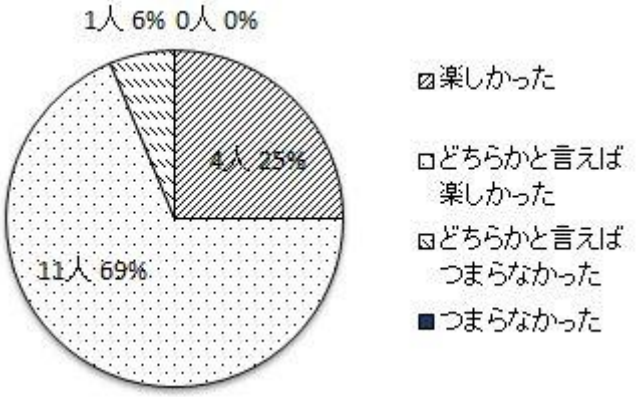
・ゲーム要素の導入により競争意識を持たせ、集中させた。

・他のペアの解答の誤りを見つけて添削を行わせることにより、各自に考えさせるようにした。

・ワークシートにはイラストや写真を載せ、題材や活動に興味を持たせるようにした。

○ アンケート調査（１２月：回答数 14 人）

授業は楽しかったか



９月の結果と比較すると「楽しかった」と答える生徒の割合は下がっているが、「どちらかと言えば楽しかった」を合わせると、94%となり、前回の割合（95%）をほぼ維持できていた。

教師の変化

・授業内容を考えるときに、一つひとつの活動の意味を意識しながら計画を立てるようになった。
・生徒一人ひとりの反応に、以前より気を配るようになった。

今後の課題（次の改善点など）

１２月実施のアンケートで定期試験の結果に対する満足度をたずねたところ、「満足」「まあまあ満足」と答えた生徒の割合は、発展クラスでは 74%だったところ、基礎クラスでは 25%にとどまった。定期試験における平均点の差も 20 点前後から縮まることがなく、授業は楽しんでいたものの、それが家庭学習等の自主的な努力にはつながらず、まだまだ課題が残った。今回試みた「生徒へのこまめな声掛け」や「ペアワーク」は少人数クラスでは実施しやすいが、40 人規模のクラスでまったく同じことをやって同じ効果が得られるかということについては疑問が残る。また、今回基礎クラスで行ったのと同様の授業を発展クラスでも行ってみたが、一部の生徒から「楽しめる授業ではなく、問題演習中心の学力がつく授業内容にしてほしい」という要望が出た。学習進度の速い生徒には家庭学習用に追加の課題を与えるようにしていたのだが、すべての生徒のニーズに応えることの難しさを感じた。

まとめ・感想

ただ漫然と授業を行うのではなく、目標を設定して行ったため、度々内容を見直すことができた。事前に活動の目的や効果の説明をしておくと生徒の協力が得やすいと感じた。

今回の研修の参加者のみなさんの研究熱心さや向上心には驚かされるばかりで、自分の教師としての姿勢を問われているように感じた。今後もこの研修で得たことを活かしていく努力を続けたいと思う。

言語活動につなげる文法指導

科目名	英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象生徒は２年生理系クラスの 80 名（男子 36 名、女子 44 名）である。ほとんどの生徒が大学進学を希望しており、基礎学力は高い。学習には前向きに取り組むが、部活動や理数科目の勉強を優先する傾向があり、自分の意見を人前で発表するのが苦手な男子が少なくない。

解決すべき課題

新しい学習指導要領で明示的に述べられている「英語の授業は英語で」という観点から、できる限り英語を用いて授業を進めた。英語による内容理解、英文再生、サマリーなどの活動をペアワークやグループワーク形式で行ったが、生徒が話す英語は正確さに欠け、書く英文は主語や動詞の扱いなど構文の基本的な誤りが散見され、いわゆるグローバルエラーが目立った。授業の活動を振り返り、もっと文法指導が必要なのではないかという迷いが自分の中に生じていた。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 「生徒による授業評価」の文法指導に関する意見や要望（７月実施）

本文の解説をもう少し詳しくする程度でよいという声はあるものの次のような要望があった。

・文法が身についていないので復習したい。
・実際に模試等に出てくる文法の演習問題をやってみたい。
・文法の説明をもう少しゆっくりしてほしい。
・文法はゲームのなかでなく別にやってほしい。
・文法や書き換えが雑に済まされているので理解できない。

これまで行ってきた英語の授業は楽しいというコメントもあったが、コミュニカティブな授業を目指すなかでこれらの不安を解消していく必要があると考えた。

○ 第１回文法テストの結果（９月実施）

これまで授業で扱った文法項目がどの程度定着し、応用力がついているかを検証するため、50 点満点の文法のテストを行った。内容は大学入試問題 35 問と 5 題の和文英訳問題である。77 名が受験し、平均点は 18.8 点であった。

リサーチ・クエスチョン

コミュニカティブな授業のなかで英文法の定着を目指すにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：生徒が英語を使いながら英文法を学ぶ時間を設け、3 ヶ月後に前回の文法テストより高い得点をとれる生徒が 6 割以上になる。

改善のための手だて

○ 帯活動として、文法学習に役立つ言語活動を行えば語法や文法に関する理解が深まるだろう。

・『英文法リアクショントレーニング』（アルク出版）の CD を使って、最初の 5 分間を、目標とする文法項目が含まれた英文を聞いてリピートする活動、日本文を英文に口頭で置き換える活動、ターゲットセンテンスのディクテーション活動に充て、音声面から文法知識の定着を図る。

○ 明示的文法学習の時間を設ければ、生徒の満足感が得られ、文法知識の定着も高まるだろう。

・生徒の要望や文法テストの結果をふまえて、日本語による文法説明を行う。

・文法教材（『夢をかなえる英文法』アルク出版）を用いて問題演習を行う。

○ 学習した文法項目で英文を作らせれば、文法知識が自己表現に使えることを実感できるだろう。

・数人を指名して自作の英文を板書させ、添削、解説を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 5 分間帯活動

使用教材の中のターゲットセンテンスには生徒の日常生活に根ざした表現が多く含まれており、生徒は楽しそうに活動に参加していた。

○ 文法項目の明示的学習

グループワークに充てていた時間を減らして説明の時間を増やしたため、そのような文法の学習に楽しさを感じられない生徒も見られた。教師とのやり取りは日本語に頼ることが普通になった。

問題演習については、新出の文法項目及び１年次に学習した関連項目の事項を織り交ぜ、時には時間を少しおいてから行った。「難しい」「わからない」などの声があがり、口頭練習→説明→問題演習という流れで文法を定着させるには、適切な例文で明快に説明を加える必要があると感じた。

○ 文法項目に基づく英作文活動

生徒の能力によってその取組状況に違いが見られた。英語力が高い生徒ほど楽しみながら自己表現としての英文を書くことができ、難しいと感じた生徒の英文は辞書の例文を借用したり、単語を入れ替えたりしただけのものだった。しかし実際に習った文法項目を使うことで、生徒の気づきが起こるようになった。書いた英文の誤りを指摘すると、自分で直せるようになった。

○ 第２回文法テストの結果（１２月実施）

２回目の文法テスト（50 点満点）は 74 名が受験し、平均点は 20.6 点であった。

9 月のテスト	12 月のテスト
平均点　18.8 点	平均点　20.6 点
2 回ともテストを受け 9 月のテストより点数が上がった生徒数　72 名中 42 名　　58.3%	

平均点は少し高くなったものの、「6 割の生徒が 9 月の得点を上回る」という目標は達成できなかった。個々の生徒の伸びを確認するために、対応のあるサンプルの t 検定を行ったが、残念ながら有意差は認められなかった。（$p = 0.09 > 0.05$）。

＊目標達成を阻んだと考えられる要因

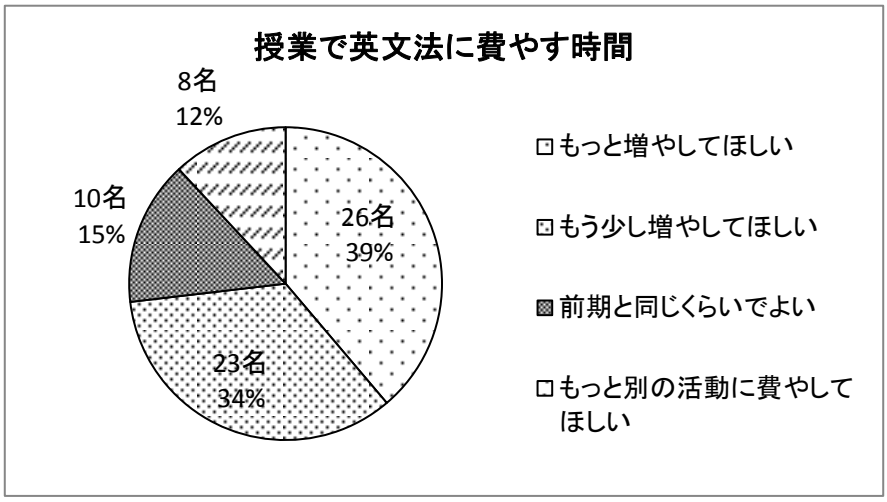
① 平均点が示しているように、９月と１２月に作成した文法問題はどちらも難しすぎた。問題は本校の３年生が使用していたテキスト『Grammar　Collection 英文法・語法問題集』（いいずな書店）から選んだもので、語彙力不足も影響していたのかもしれない。

② 家庭学習等で、自主的に取り組める課題を充分に課さなかったため、問題演習が不足していたと思われる。生徒が継続的に演習課題に取り組むシステムを構築すべきだった。

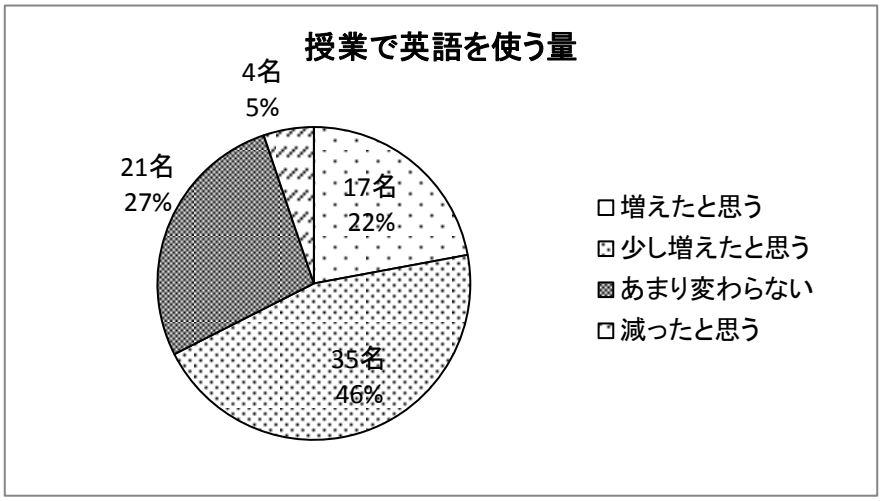
③ 授業の進め方を変えたことに対応できない生徒も一部見受けられた。

○ 後期（９月～１２月）の授業に関するアンケート結果（１月実施）

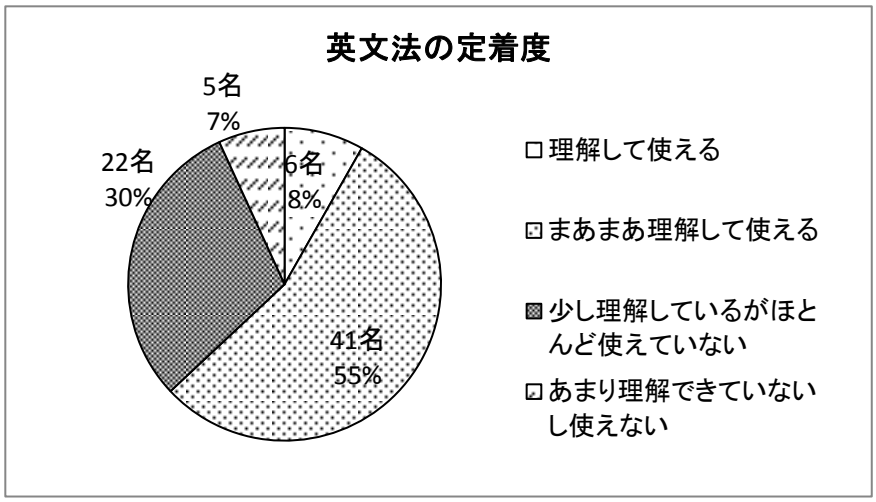
後期の授業中に行った文法に関する学習時間や授業で英語を使う量、文法定着の自己達成度、文法の学び方等についてアンケート調査を行った。



（回答数：77 名）



（回答数：77 名）



（回答数：74 名）

文法学習の時間を増やしたにもかかわらず、73%の生徒がさらに増やすことを希望していた。さら

に授業中の文法の学習方法について複数回答可の形式で要望を聞いたところ、3 分の 2 以上の生徒が問題演習を希望していることがわかった。やはり生徒は「使える文法」というよりは「大学入試のための問題演習」に対する意識が強く、1 年次から英語を学習する意義を理解させ、到達目標を示しながら指導することの重要性を感じた。また、音声活動・説明・練習・作文の流れで文法指導を充実させたつもりだったが、37%の生徒には「理解・使用」の自信を与えられなかったのは残念である。ゲームやグループワークを減らしたことで懸念された「英語使用」については、27%が「前期とあまり変わらない」、68%が「使っている時間が増えた」と感じており少し安心した。毎回の帯活動や自己表現の作文活動、サマリーや内容再生活動を続けたことでそのような印象を与えたのかもしれない。

教師の変化

今までは生徒が英語を使うための活動ばかりに目が向いていたが、落ち着いて考える「静」の活動を取り入れ授業構成のバランスを考えるようになった。授業が単調になると予想される場合は、ビデオ映像やプレゼンテーションスライドを使うようにした。スピーキング課題をクリアするごとにシールを貼っていくカードを自己管理させるなど、学習動機を高めながら、生徒の自律的学習を促すことを重視するようになった。その活動では、始業前や授業前後の休み時間を利用して、スピーキング課題に取り組む生徒も出てくるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善には学習した内容をスピーキング活動に発展させる視点が欠けていた。「英語で授業」を再度基本に据え、生徒に英語を使わせながら文法を定着させる指導法について、専門書を読むなどの自己研修に取り組み、理論的な裏づけに基づいた実践を進めていきたい。

まとめ・感想

今回の取組で越えなくてはならない大きな壁に気がついた。文法説明を日本語で行うと「英語で授業」の雰囲気を維持するのは難しい。また、英語を使わせながら文法指導を行いたいという教師側の思いだけでは、生徒の要望に合致しない。さまざまな場面において言語使用の機会を設け、そのなかで文法・語彙の知識の必要性を生徒自身に感じさせることが学習指導要領の具現につながるのではないだろうか。従来型の文法学習にこだわっていては英語の表現力を伸ばすことはできない。そのためには、大学入試だけを最終的なゴールにするのではなく、将来的に役立つと生徒が考えて取り組める言語活動をさせながら文法知識の定着を図ることが今求められているのだろう。

授業改善にあたって参考にした資料等

金谷　憲(監修). (2011).『英文法リアクショントレーニング（基礎編・応用編)』アルク
木村達哉(監修). (2012).『ユメブン　夢をかなえる英文法　高校修了～大学入試レベル)』アルク
篠田重晃(編著). (2012).『Grammar Collection　Full Version 英文法・語法問題集 』いいずな書店
大屋和彦. (2013).「文法学習をより豊かな自己表現活動につなげるために」『英語教育』2013 年 11 月号. 大修館書店

学習意欲と達成感を高める語彙指導

科目名	英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は２年生２クラス合計 39 名（男子 11 人、女子 28 人）である。英語に苦手意識を持つ生徒もいるが、一方で英語という言語そのものに関心の強い生徒もいる。大きな声で音読やペア活動を行い、教師とのやり取りにおいても積極的に答えるクラスである。

解決すべき課題

・教科書の語彙を調べさせると、品詞の理解が十分でないので、辞書で正確な訳語を探せない。
・語彙学習の時間は、生徒が受け身になり活気がなくなる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 生徒の取組状況の観察

４月当初、教科書語彙の予習を課したが、辞書で調べても訳語を見つけることが難しいようであった。そこでフレーズごとに日本語訳がついた対訳ワークシートのなかで新出語彙を探させ、その訳語と思われるところにアンダーラインを引かせた後、辞書で確認させた。

しかし多くの生徒が対応する日本語訳は探せても、品詞の知識が不十分なために、あらためて辞書で対応する用法を確認することができなかった。なかには辞書で確認せずに、指名されてもワークシートにある意訳をそのまま答える生徒や、正答を伝えられるのをただ待っている生徒もいて、活気もなく、効果的な語彙学習になっていなかった。

○ 事前アンケート

７月に、英語の４技能と文法、単語・熟語について、その力をどれだけ伸ばしたいか聞いたところ、各項目で「ぜひ伸ばしたい」と回答した割合は以下のとおりであった（回答数：37 人）。

話す力：76%　書く力、聞く力：66%　読む力、単語・熟語の力：58%　文法の力：50%

単語・熟語を「ぜひ伸ばしたい」と答えた生徒の割合は比較的低かった。本来、単語・熟語の力は英語の４技能すべてにかかわる必要なものであるのにこのような結果が出たのは、学習の必要性が十分に自覚されていないだけでなく、学習を楽しいと感じていないことも原因ではないかと推察された。

改善の目標

生徒が学習効果を実感しながら積極的に語彙学習に取り組めるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：語彙学習の活動が、以前の方法に比べて、「楽しい」「役に立つ」という生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 授業のなかで、例文や画像などをヒントに意味を類推させる活動をさせれば、活動に集中して楽しく語彙学習に取り組めるだろう。

・予習として調べてくる代わりに、授業中に文脈のなかで意味を類推させることで、記憶に残りやすくする。

・例文はなるべく理解しやすい英語を使って作るようにする。

○ 必要な語彙知識を定義し、それに応じた活動に取り組ませれば、効率よく学習できることで、学習意欲が高まるだろう。

・受容語彙と判断した語については、意味を２つの選択肢（品詞の異なる２つの訳語／紛らわしい２つの訳語）から選ばせる。

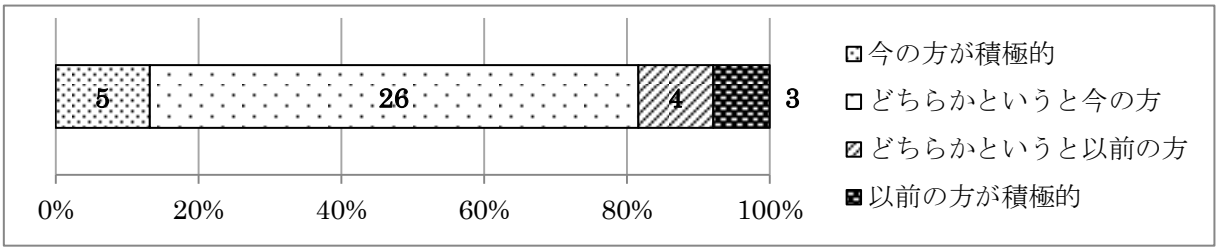
・発表語彙と判断した語については、例文や英語による定義から、提示した日本語に合うスペリングを書かせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

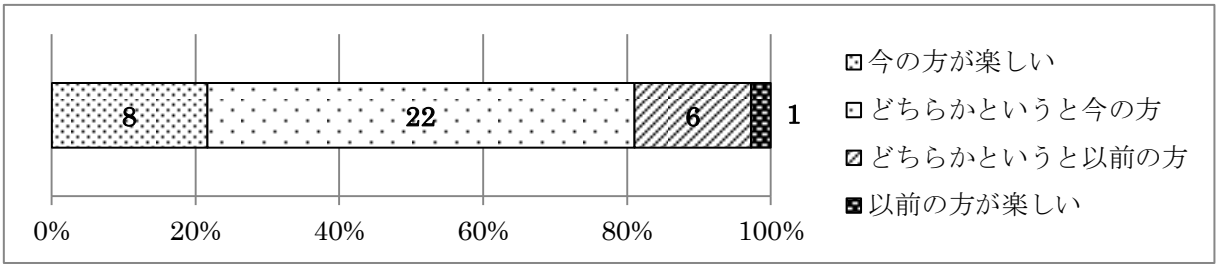
○ 事後アンケート：新しい語彙学習活動の効果

語彙の学習活動を新しい方式にしたことで、生徒の「積極性」「楽しさ」「学習方法の取り組みやすさ」「学習方法の役立ち度」「単語の覚えやすさ」「品詞の違いのわかりやすさ」が、どのように変化したか調べた。

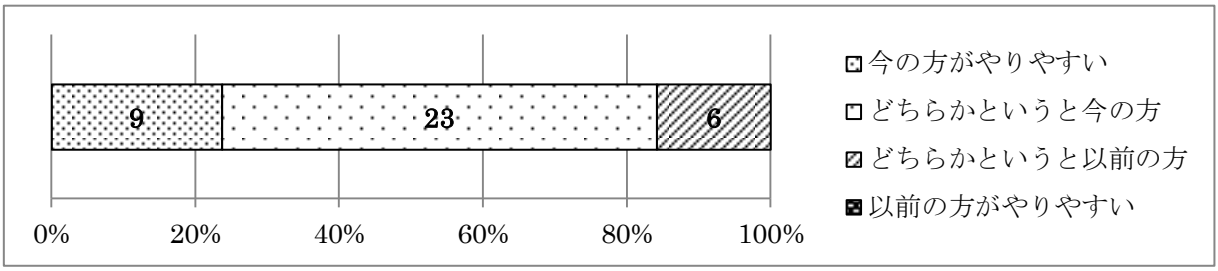
「積極性」について（回答数：38 人）



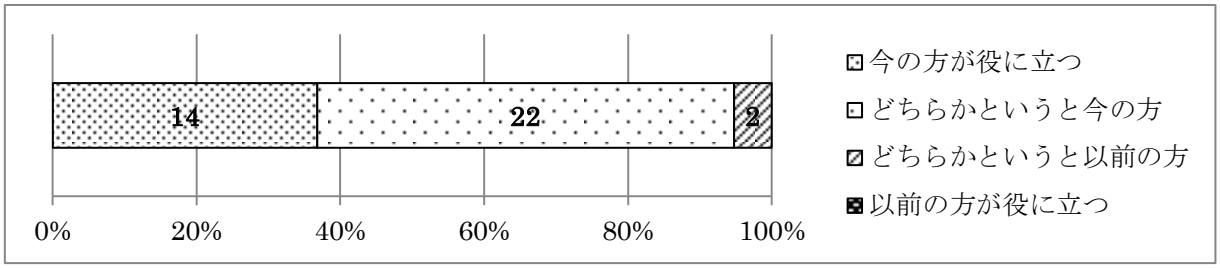
「楽しさ」について（回答数：37 人）



「取り組みやすさ」について（回答数：38 人）



「役立ち度」について（回答数：38 人）



改善の目標としていた「楽しさ」「役立ち度」については、それぞれ新しいやり方に肯定的な回答が 8 割、9 割を超え、目標を達成できた。その他、2 項目についても、改善策に賛同する回答が 8 割を超えた。

さらに、改善した語彙活動のどのような点が有効だったかを詳しく調べるために、「取り組みやすく」「役立つ」と思った理由（自由記述）を見たところ、次のようなものがあった。

・絵を見ながら単語の勉強をするので、覚えやすいし、思い出しやすい。

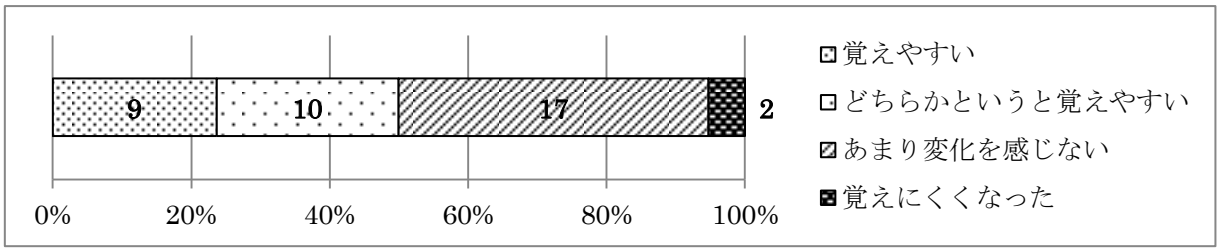
・単語が授業内ですぐ確認できるのがいい。説明する英語を聞こうとして、自分で考えていくので、確実に力がつくと思う。

・単語を英語で説明することで今までよりたくさん英語を聞ける。

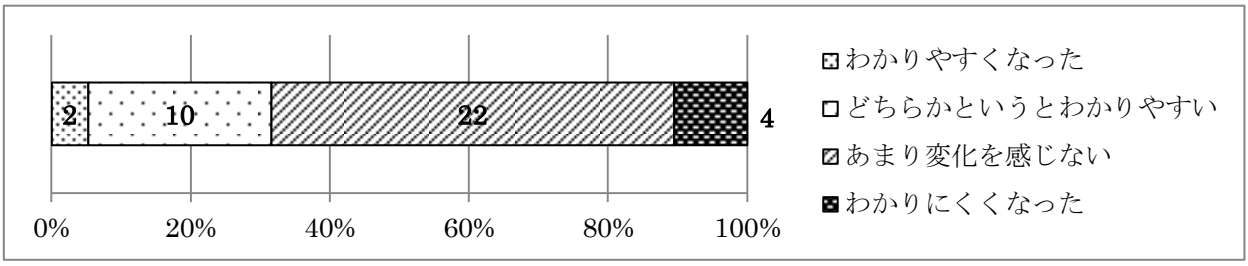
授業中の観察からも、生徒たちは以前に比べ、はるかに集中し、かつ楽しく語彙学習に取り組んでいることが見て取れた。彼らは語彙の説明の時の教師とのやり取りを楽しんでおり、このやり取りで、語彙の理解が進んだり、覚えやすくなったりしたと感じているとのコメントもあった。

一方、「単語の覚えやすさ」「品詞の違いのわかりさすさ」について新しいやり方を肯定的にとらえている生徒の割合は、それぞれ 5 割、3 割強にとどまった。単語を覚えるためには、一つの活動だけでは不十分で、リーディング活動でさらに単語に注意を向けさせたり、自己表現活動のなかで使わせたりする場面が必要だったのかもしれない。品詞の違いを例文などから理解するのは、こちらが想定したよりずっと生徒にとっては難しかったようなので、あらためて品詞の基本を説明するなど、生徒の理解を確認しておく必要があるだろう。

「単語の覚えやすさ」について（回答数：38 人）



「品詞の違いのわかりやすさ」について（回答数：38 人）



教師の変化

研修に参加するまでは、語彙学習に関しては、生徒の取組状況から問題は感じていたものの、授業内での学習活動の根本的な改善策を探すよりも、家庭での学習方法を指導することが多かった。

今回の授業改善で、生徒たちが楽しんで取り組んでいるのを見て、やってみようと生徒に思わせる「楽しさ」があり、明確な目標を理解しながら効果を実感できるような活動の仕掛けが、以前から必要だったと反省させられた。以前より授業の準備に時間はかかるものの、少しの工夫で生徒の反応がいかに違うかを目の当たりにすると、生徒たちの反応を予測しながら仕掛けを作り、その結果を授業で確認するというサイクルに充実感を感じるようになり、授業が楽しくなった。

今後の課題（次の改善点など）

・読解活動において語彙学習で扱った語彙に注意を向けさせたり、自己表現活動のなかで発表語彙を使って英文を作らせたりして、語彙の定着を促したい。
・品詞の区別が課題として残ったので、より適切な例文を提示するとともに、あらためて明示的に品詞の働きを指導する必要があるだろう。

まとめ・感想

研修を通じて、動機付けや 4 技能の指導にかかわるさまざまな実践研究や理論に触れることができた。語学習得には、もちろん本人の努力が不可欠だと思うが、生徒たちに努力を求める前に、まず教師が、生徒が興味を持って積極的に学習しようとするような授業作りに努め、そのための自己研さんを続けることが必要であるということを再認識した。このような思いに至ったのは、つねに知的刺激と励ましを与えてくれたアカデミアのスタッフと、意欲的な研修仲間のおかげである。この出会いに深謝し、今後も目の前の課題に一つずつ取り組んでいきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司.(2011).『英語で英語を読む授業』研究社
高梨康雄・卯城祐司.(2000).『英語リーディング事典』研究社出版
田中茂範・阿部一・佐藤芳明.(2006).『英語感覚が身につく実践的指導―コアとチャンクの活用法』大修館書店

批判的に読み、論理的に伝える力を育む英語授業

科目名	異文化理解	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は２年生１クラス 18 名（男子 6 名、女子 12 名）である。1 年次の成績上位者で編成された習熟度別クラスであり、英語に対する学習意欲が旺盛で、授業にも積極的に参加する。ほとんどの生徒が英語に対して得意意識があり、授業でも自主的・積極的に英語を使っている。

解決すべき課題

個々の生徒の能力は非常に高く、授業へも積極的に参加するが、十分にその能力が生かされ、伸ばされているとは言えない。与えられた題材を読んだり聞いたりして理解することに問題はないが、それに対して批判的に考えることがほぼない。自分の考えや感じたことを、論理的かつ友好的に相手に伝えられる能力を育む必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 事前アンケート調査（９月）：授業中の英語の活動に対する好き嫌い

・「個人による発表」について「わりと好きだ」「いやではない」と答えた生徒は、全体の 68%であった。また、「あまり好きではない」と答えた生徒は、32%であった。このことから、英語の成績上位者の集団であっても、英語を人前で話すことに不安を感じている生徒が予想以上に多いことがわかった。

・「今後伸ばしていきたい英語力」について書かせたところ、高い英語力がありながら、以下のような力を身につけたいと生徒は望んでいた。

今後伸ばしていきたい英語力 （生徒 18 人による複数回答）	人数	割合（18 人中）
会話において言いたいことを自由に表現する力	12	67%
自分の意見を正確に表現する力	7	39%
自分の意見を論理的に話す力	4	22%
自信を持って人前で話せる力	3	17%
仕事でも通用するレベルの高い英語力	3	17%

これまでの授業では、教科書の内容理解の後、読みとった情報をもとにグループごとにスキットを発表させ、それに基づくディスカッションによって考察させることで、さらに深い理解を促していた。生徒にできるだけ英語で話す時間を与えたい、と考えた取組であったが、実は、生徒はさらに高い能力を身につけたいと望んでいた。グローバル人材の育成が教育現場で課題となっているなか、英語の 4 技能だけでなく、論理的思考および批判的思考を養うことが重要であり、生徒自身もグローバル人材になるためには、自分にどのような力が必要なのかを真剣に考えているようであった。

リサーチ・クエスチョン

英文を批判的に読み、それに対する自分の考えを論理的・積極的に伝える力を身につけさせるためには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：

①「個人による発表」を「わりと好きだ」「いやではない」と感じる生徒が 8 割以上になる。

② 批判的・論理的思考を評価するルーブリックで、4 段階中 3 以上の評価をとる生徒が 8 割以上になる。

改善のための手だて

○ 発表の前に、評価のルーブリックを提示すれば、目標が明確になり、生徒はより意欲的に活動に取り組むことができるだろう。

・批判的に聞き、論理的に意見を言える力を下のような 4 段階のルーブリックにまとめ、どのような能力の変化が求められているのかをわかりやすく示す。

	評価基準			
	4	3	2	1
批判的に聞く力と論理的に表現する力	聞いた情報をしっかり理解した上で、信用のおけない情報を正確に、また論理的に指摘できる。	信用のおけない情報を十分に指摘できるが、論理的にそれを表現するには課題が残る。	信用のおけない情報を少しは指摘できるが、議論の筋道の立たないコメントにとどまる。	聞いた情報をその信用性を考えることなく、何の疑問も持たずに受け入れ、あいづちを打つにとどまる。

・授業中の発表時に、生徒一人ひとりに、何ができていて何ができていないのかをルーブリックを参照しながら理解させ、アドバイスを与える。

○ 論理的思考について理解したうえで、発表の分析をさせれば、生徒は英語をより批判的・論理的に理解するようになるだろう。

・トゥールミン（哲学者）が提示した「議論の構造」のモデル（結論、証拠、論拠などの構成要素からなるモデル）を紹介し、自分や相手の話の構成に不足している要素はないかを確認する活動を行う。

・慣れてきた生徒には、自分や相手の話の内容を吟味させ、より説得力のある内容にするためにはどうすればよいかを考えさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 事後アンケート調査（１２月）：授業中の英語の活動に対する好き嫌い

・論理性の意識をもって聞いたり話したりする活動を続けた結果、個人による発表が「わりと好きだ」「いやではない」と答えた生徒が、９月時点の 68%から 72%に増えた。しかし、「あまり好きではな

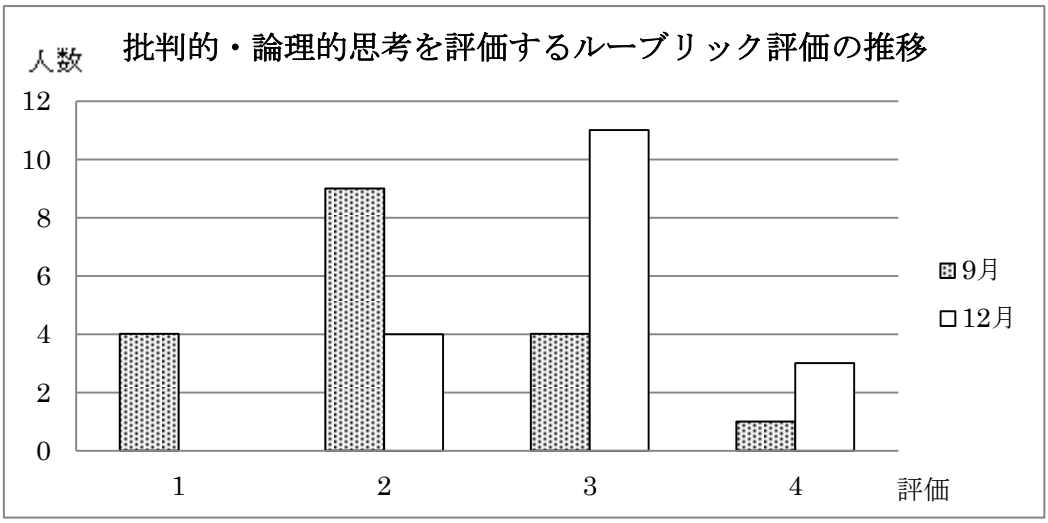
い」と答えた生徒が減った反面、「嫌いだ」と答えた生徒が現れた。授業の難度を上げることによって、自信のついた生徒がいた一方、授業についていけないと感じ、自分の能力を否定的に見てしまう生徒が現れたことは非常に残念であった。

・自由記述のなかで「伸びたと感じる力」に触れている生徒の数と割合は下の表のようになった。毎回授業の後で「とても疲れた」と言う生徒が多かったが、授業のなかでしっかり考えながら話し、また相手の話もかなり集中して聞いていたので、それを乗り越えて達成感を得ることができたようである。

伸びたと感じる力 （生徒 18 人による複数回答）	人数	割合（18 人中）
意見をまとめて発表する力	7	39%
論理的に説明できる力	7	39%
英語のスイッチが常にオンの状態になった	4	22%
自分で深く考える力	3	17%
人それぞれの考え方を理解する力	3	17%

○ 批判的・論理的思考の評価の推移（９月～１２月）

・評価ルーブリックで 4 段階中 3 または 4 をとった生徒は、９月時点の 28%から 78%まで増えた。また、下のグラフからもわかるように、１２月の評価では「1」の評価がついた生徒がいなかった。「4 段階中 3 以上の評価をとる生徒が 8 割以上」という到達目標には届かなかったものの、すべての生徒が力を伸ばしたと言える。



〈考察〉

改善の目安には達しなかったが、全体的に見て今回の授業改善の取組は成功したと言えるだろう。はじめは多くの生徒が、入ってくる情報に対してただあいづちを打つレベルだったが、情報を批判的に理解し、自分の考えを論理的に説明する練習を行うことで、生徒たちの能力と意識に大きな変化が見られた。しかしその一方で、授業の難度が変わったことで、意欲をなくしてしまう生徒が現れたので、そのような生徒の個別の指導・支援がますます重要になってくる。

教師の変化

・ルーブリックを作成し到達目標を明確に示したことで、もう一つ上のレベルに評価を上げるためにはどうすればよいかを、具体的にアドバイスできるようになった。
・批判的読解や論理的思考に関する文献を読むことで、授業の幅を広げることができた。生徒と教師、双方にとって、よい知的刺激となった。
・この授業の独自のアンケートを行って生徒の意識を確認することで、より生徒の気持ちに寄り添った授業改善を行うことができた。また、授業を改善したいという教師の気持ちを生徒が受け止めてくれて、一生懸命授業に臨んでくれたので、より熱意をもって改善に取り組むことができた。

今後の課題（次の改善点など）

・授業改善の取組は年度初めから計画的に行い、俯瞰的視野を持って進めたい。
・生徒一人ひとりのカルテ（学習の記録）を作り、個々の生徒のできるところ、できないところを把握することで、きめ細かなサポート体制の整った、より質の高い授業を実現したい。
・教師自身が意識的に、批判的・論理的思考について学び、研さんを積み、さらなる指導内容の向上を目指したい。

まとめ・感想

まだ初任者の頃、枠にとらわれた授業をしていると指摘された。準備してきた内容をきちんとその時間に終わらせることが一番大事だったあの頃とは違うと思っていたが、教員 7 年目の今もまだ枠から出ることを恐れている自分を発見した。生徒の持っている力を決して過小評価せず、自分の枠を超えることを恐れず授業ができれば、生徒と一緒に学びの場を作り上げていく楽しみが生まれ、生徒の力をもっと伸ばせるだろうと感じた。力を込めてボールを壁に向かって投げれば、大きく跳ね返ってくる。同様に、教師の真心や工夫でいっぱいのボールを投げれば、生徒たちは思いっきり投げ返してくれる。研修を通して、いかに多くの方法で、生徒に投げるボールを工夫して魅力的にできるかを学ぶことができた。そのような「引き出し」をたくさん増やすことで、より生徒に合った、楽しい授業ができるようになると思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

大河内祐子. (2004).「批判的読みにおける文章の構造的側面の役割」.東京大学大学院教育学研究科 http://hdl.handle.net/2261/4498 （2014 年 2 月 1 日アクセス）
真田弘和. (2013).「生徒の意識及び論理思考の可視化を試みて」http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/bulletin/vol3_pdf/5-3.pdf （2014 年 2 月 1 日アクセス）

話すことに自信を持たせる「英語表現」の授業

科目名	英語表現Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

本校では、英語表現Ⅰの授業を１クラス２展開で行っている。１クラスを、単純に出席番号で前半クラスと後半クラスに分けている。担当している１年生２クラスはともに 20 人で構成され、男女比もほぼ半々である。進路はほぼ全員四年制大学を考えているようである。どちらのクラスでも、中学校３年次の英語の評定に現れる以上に、力のある者とない者の差が比較的大きいように感じる。２クラスのうち、一方のクラスは、全体的に真面目でおとなしい。他方のクラスは活発でよく声の出る雰囲気をもつが、授業にあまり積極的に取り組むことができない生徒も数名いる。

解決すべき課題

英語の読解力や文法的知識の点においては、深刻な問題を抱えている生徒は、どちらのクラスにもいないようである。しかし、発話によるコミュニケーション活動になると、途端に活気がなくなってしまう。教科書にある短い発話練習では、そのモデルにしたがって発話することはできる。しかし、ALT とのコミュニケーション活動のような即興性が求められる会話では、問いかけられていることを理解するのに時間がかかり、また理解できたとしても十分な返答ができない。英語を聞きとる力や書く力に比べ、話す力の欠如が大きな課題であると思われた。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 第１回アンケート（５月実施）

生徒の「英語表現Ⅰの授業に対する積極性」「英語の諸活動に対する好き嫌い」「英語表現Ⅰの授業で伸ばしたい英語の力」を調査した。特に、「伸ばしたい英語の力」のうち「英語を話す力」の結果に注目した。

Q:「英語表現Ⅰ」の授業で英語を話す力を伸ばしたいと思うか。

１．ぜひ伸ばしたい　32 人
２．できることなら伸ばしたい　5 人
３．それほど伸ばしたいと思わない　0 人
４．まったく伸ばす必要を感じない　0 人［アンケート総数 37］

この結果から、生徒たち全員が英語を話す力を伸ばしたいと思っていることがわかった。彼ら自身もまた、現状を変えていきたいという気持ちを持っているように受け止められた。

リサーチ・クエスチョン

無理なく自己表現をさせながら、英語を話す自信を持たせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：事後アンケートで、英語表現Ⅰの授業を通じて話す力が伸びていると回答する生徒の割合が 70%を超える。

改善のための手だて

○ スピーキング活動の際、ライティングタスクから発展させて行うようにすれば、負荷が少なくなって自分から積極的に話すようになるだろう。

・当科目の教科書『Departure English Expression I』（大修館書店）は各レッスンの最後に、そのレッスンのテーマに沿った内容の英文を書かせ（Write on Your Own）、それに基づいて生徒同士の対話練習（Speak Up）をさせる構成になっているが、その対話練習において、さらにオリジナルのやり取りを 1 ターン以上加えるよう指示をする。

○ 文法事項をベースとした簡単な対話練習をさせれば、発話へのよい動機付けとなるだろう。

・各レッスンにはターゲットとなる文法事項が提示されているが、それを単に解説したり、関連問題を解かせたりするだけではなく、その文法事項を用いた比較的簡単な対話練習をさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ ライティングタスクを活用した発話練習

6 月から、生徒が興味を持つようなトピックについて書かせた課題作文に基づいた対話練習を行った。対話の出だしはモデルにならって行うが、それに加えて、内容に関する質問や感想など、どんなことでもよいので追加の質問をいくつかし、会話を 2 分間続けるよう指示をした。

共通のトピックについての作文なので、質問する側の生徒たちは話される内容の展開がある程度予測できるため、質問を考え出すのにそれほどの難しさはなかったようである。また、質問される側も、自分が書いた内容について、英文を見ながら答えることができるため、より自信を持って答えることができたようである。実際、対話が続かなかったり、日本語で話をしはじめたりする生徒はほとんど見受けられなかった。

○ 文法事項をベースとした発話練習

学習した文法事項を含んだ英文を作らせながら、それを対話練習に発展させるという方法もあわせて行った。例えば、関係代名詞がターゲットになっている場合、

What is the best (1) that you have ever (2)?

という枠組みと、(1), (2)に入る組合せの例として、book-read, TV program-watched などを提示し、完成した文をもとにして、自由に対話練習をさせるというものである。

しかし、この活動は生徒たちにとってはかなり難しかったようである。文法事項を用いた英文はいくつか作れるものの、そこから内容を膨らましきれず、対話はすぐに途切れてしまっていた。

○ アンケートの結果

１１月に２回目のアンケートを行い、５月と同じ項目について生徒の意識を調べ、同様に「英語を話す力」の結果に注目した。

Q:「英語表現Ｉ」の授業で英語を話す力が今までよりも伸びたと思うか。

１．とても伸びたと思う	5 人
２．どちらかといえば伸びたと思う	22 人
３．それほど伸びたいと思わない	13 人
４．まったく伸びていないと思う	0 人［アンケート総数 40］

この結果から、英語を話す力が伸びたことを肯定的に捉えている生徒の割合は 67.5%であることがわかった。目標達成の目安である 70%には、わずかに届かなかった。

教師の変化

授業中に教師が日本語を使用する時間が圧倒的に減少した。例えば、今まで文法事項の説明は授業中に日本語で行っていたが、家庭学習用に作ったワークシートで大半を済ませてしまい、授業ではその文法事項を使うさまざまな言語活動を必ず取り入れるようになった。また、未習語については、その語の定義を英語で説明したり、用例を口頭で示したりすることで意味を伝えるようにし、よほど難しい語句でない限り、日本語での説明はほぼ皆無になった。さらにリスニング活動については、その題材の背景的知識をできるだけ英語で説明したり、簡単なやり取りによって生徒たちにスキーマを与えたりしてから、設問を扱うことにした。

最も大きな変化は、抵抗感なく英語で話す生徒たちの姿を見ることが楽しくなってきたことである。英語での語彙説明にうなずいたり、身振り手振りを交えたりしがら何とか対話をしようとする生徒の様子を見て、とてもうれしいと感じるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

ただ単に題材を与え、それについて対話をさせるのは難しい。そのような活動を成功させるには、内容だけでなく語彙・表現についても、ある程度の背景的知識が必要であることを痛感した。最初から高いハードルを設定せずに、年間を通じた指導計画だけでなく、ひとつの活動のなかでも、より段階的な過程を設定しながら、目標をクリアさせるという手順を踏むべきであった。

そのためには、より周到な手順を考え、また実際の場では、より柔軟な対応を心がけることが必要である。また、生徒たちの反応を十分観察し、その声に耳を傾けて、幾度も軌道修正をしながら、最終的な目標を達成できるようにすべきである。

まとめ・感想

昨年度までは、自分が普段の授業中に英語を使うことや生徒に英語を話させることなど、まったくと言っていいほど意識したことがなかった。文法事項の定着のために問題を解かせることや、読解力の向上のために本文和訳や速読演習を課すといった、いわゆる旧来型の教え方に終始していたし、生徒たちのニーズにもそれで十分応えていると思っていた。

しかし、今回の授業改善を通して、真の意味で文法事項が身につくというのは、客観式の問題が解けるということではなく、使用場面も理解した上で、自己表現で使えるようになることだということ、日本語訳に頼らずに英文を理解させるリーディング活動が重要であること、４技能を総合的に伸ばす観点から、他の技能と関連させたリスニング活動も不可欠であることなどを痛感した。

来年度以降も今年度の取り組みを踏まえ、また研修を通じて得たさまざまな知識と経験を活用して、授業改善の取り組みを継続していきたいと強く思う次第である。

授業改善にあたって参考にした資料等

山岡憲史他. (2013).『Departure English Expression I Teacher's Manual』大修館書店
野村恵造他. (2013).『Vision Quest English Expression I Advanced』啓林館
今井康人. (2012).『スーパー英文読解　英語を自動化するトレーニング応用編』アルク

英文の内容理解に基づく会話活動

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

担当クラスは、24 名（男子 5 名・女子 19 名）と 34 名（男子 15 名・女子 19 名）の 2 クラスである。全日制と定時制の生徒が混在しており、全日制のおおむね 8 割の生徒が大学・短大・専門学校に進学するが、AO 入試や指定校・一般推薦入試での進学が多い。全体的におとなしく、授業に対しては協力的である。

解決すべき課題

リーディングで学習した英文の内容についてのやり取りをさせることで、生徒に英語を使う感覚を身につけさせたい。教科書本文に関する質問を生徒自身が作ることで内容を振り返らせ、それを使った会話によって、英語を使いながら表現や内容を定着させようと試みたが、まず簡単な疑問文も思うように作ることができない生徒が多く、ねらいとしている活動に効果的に取り組ませることができない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 第 1 回授業改善アンケート（9 月実施 / 回答者数：55 人）

この活動をしばらく続けながら、生徒の英語学習への意識、自分で英語を使うことについての興味や自信をあらためて調べてみた。

1．英語は好きか。

非常に好き	まあまあ好き	少し嫌い	嫌い
8 人(15%)	28 人(51%)	9 人(16%)	10 人(18%)

2．実社会での英語の必要性についてどのように思うか。

非常に必要	まあまあ必要	どちらかと言えば不必要	不必要
37 人(67%)	18 人(33%)	0 人(0%)	0 人(0%)

3．英語を話せるようになりたいか。

自由に話せるようになりたい	日常会話程度は話したい	あまりそう思わない	なりたくない
25 人(45%)	29 人(53%)	1 人(2%)	0 人(0%)

4．英語の疑問文を正しく作ることができるか。

だいたいできる	少しはできる	ほとんどできない	まったくできない
7 人(13%)	25 人(45%)	19 人(35%)	4 人(7%)

5．英語の疑問文を正しく作れると、英語で会話をすることに役に立つと思うか。

非常に役に立つ	少しは役に立つ	あまり役に立たない	まったく役に立たない
41 人(74%)	13 人(24%)	1 人(2%)	0 人

6．授業中の「英語を話す活動」は楽しいか。

非常に楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	まったく楽しくない
9 人(16%)	28 人(51%)	13 人(24%)	0 人(9%)

○ 疑問文作成テスト

生徒の疑問文を作る力を調べるために、与えられた平叙文を疑問文にするテストを行った。

（問題構成）

① be 動詞を含む文（現在・過去時制）[4 題]

② 一般動詞を含む文（現在・過去・未来時制）[5 題]

③ 現在・過去進行形の文 [3 題]

④ 現在完了形の文 [2 題]

⑤ 助動詞を含む文 [1 題]

⑥ 疑問詞を含む文 [5 題]

（結果）平均 13.1/20 点満点（正答率 66%：54 名受験）

＜考察＞

ほぼ全員が、英語の必要性を認め、話せるようになりたいという希望を持っているが、英語の学習が好きではない生徒は 3 割を超え、4 割を超える生徒が疑問文を作ることに自信がないことがわかった。実際に基本的な疑問文を作るテストをしてみると、正答率は 7 割に満たなかった。しかし、スピーキングの活動については 7 割以上が楽しさを感じていることから、授業の活動を工夫すれば生徒の自信と力を伸ばせるかもしれないと感じた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

教科書の内容に関する疑問文を正確に作らせ、それをもとにした会話活動に自信を持って取り組ませるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：自信をもって疑問文を作ることができる生徒が全体の 8 割以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 中学校既習の英文法の復習をすれば、生徒の作る英語の疑問文が正確になるだろう。

・週に 1 度、基本的な疑問文の作り方を中心に、中学校既習文法の復習をする。

○ 教科書の内容に関する英語の疑問文を作らせ、活動前に添削してきめ細かく指導すれば、疑問文を作る自信がつくだろう。

・リーディングの授業で読んだ英文に関して、パートごとに 3 つの質問を作らせ、添削して指導をする。

○ より現実的なコミュニケーション活動のなかで自作の疑問文を使わせれば、楽しみながら相手からのフィードバックを得ることで、より正確さに注意が向くようになるだろう。

・ALT の授業で、実際に自分が作成した疑問文を使って ALT と会話をさせることで、通じる喜びを味わわせ、意味交渉を体験させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 経過

1．英文法の復習（１０月～１１月）

9 月にテストした、be 動詞(現在・過去時制)の疑問文、一般動詞(現在・過去時制)の疑問文、現在・過去進行形の疑問文、現在完了形の疑問文、助動詞を含む疑問文、疑問詞を含む疑問文の復習を行った。中学校レベルの内容ではあったが、生徒はその重要性を理解し真剣に取り組んでくれた。

2．教科書の内容に関する疑問文作成活動と添削（１２月）

1 パートにつき 3 つの英語の質問を作る活動を続けたが、生徒は興味を持って熱心に取り組んでいた。作成した疑問文を提出させて添削してから、会話活動に臨ませた。

3．教科書の内容に関する英語の疑問文の実践使用（１２月）

自分の作った疑問文を ALT とのコミュニケーションのなかで使うことを体験させた。質問したり、質問に答えたりする対話形式で行ったが、積極的に活動している様子から、生徒は自分の質問が通じることを体験することで、英語の疑問文を正確に作ることの大切さや英語を使うことの楽しさを感じ取ってくれたのではないかと思う。

○ 第２回授業改善アンケート （１２月実施 / 回答者数：52 人）

1．今年の授業を受けて英語は好きになったか。

非常に好きになった	まあまあ好きになった	少し嫌いになった	嫌いになった
16 人(31%)	34 人(65%)	1 人(2%)	1 人(2%)

2．英語の疑問文を正しく作ることができるようになったか。

だいたいできる	少しはできる	ほとんどできない	まったくできない
10 人(19%)	33 人(64%)	8 人(15%)	1 人(2%)

3．英語の疑問文を使って、英語で会話をできるようになったか。

できるようになった	少しはできるようになった	あまりならなかった	ならなかった
5 人(10%)	27 人(52%)	13 人(25%)	7 人(13%)

4．授業中の会話活動や ALT とのインタラクションは楽しいか。

非常に楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	まったく楽しくない
23 人(44%)	23 人(44%)	4 人(8%)	2 人(4%)

5．このような会話活動を続けると、英語が話せるようになると思うか。

自由に話せるようになる	日常会話程度はできる	あまり話せるようにならない	話せるようにならない
8 人(15%)	29 人(56%)	14 人(27%)	1 人(2%)

「英語が好きか」という問いに対して、「英語が非常に好き」「まあまあ好き」と回答した生徒が、66%から 96%に増えたことは本当にうれしい結果であった。

英語の疑問文については、「だいたい作ることができる」「少しは作ることができる」と回答した生徒が、58%から 83%に増えた。改善への取組の成果として、生徒に自信をつけさせることはできたように思われる。

授業中のスピーキング活動が「非常に楽しい」「まあまあ楽しい」と回答した生徒は、67%から 88%に増えた。また、このような活動を続けることで「英語が自由に話せるようになる」「日常会話位は話せるようになる」と回答した生徒が 71%いた。この 2 点は、今後のさらなる授業改善を目指すための動機を大いに与えてくれた。

教師の変化

授業をしながら何となく感じて、何となく行っていることを、課題の発見・改善の目標・改善の手だて・事後の検証のように系統立てて省察することで、日々の授業での活動の意味も明確になるということにあらためて気づいた。また、今までも生徒の能力を高めたいと思って授業を行ってきたが、今回の「授業改善プロジェクト」に取り組むことを通して、今まで以上に活動や教材を精選して計画的に授業を行い、生徒に成果を感じさせられるような指導を行っていくことの必要性を感じた。

今後の課題（次の改善点など）

これまでの授業で十分にできているとは言えない「聞くこと」「話すこと」「書くこと」のトレーニング的な活動を、もっと授業のなかで行う必要があるだろう。今回継続的に実施してきた、内容に関する会話活動は多くの生徒の賛同を得たが、今後も、自己研さんに励みながら、生徒が興味を持ち、その効果を信じてついてきてくれるような活動を吟味して実施したい。また、授業そのものが実践的コミュニケーションの場となるよう、教師・生徒が英語を使って意味のやり取りをする場面も、ますます増やしていきたいと思う。

まとめ・感想

自分自身が英語を長年学び続けている動機の一つに、英語を使ってコミュニケーションをすることの喜びがある。ほとんどの生徒も英語を話せるようになりたいと思っているなかで、英語を学ぶ動機付けで終わるのではなく、授業を受けると英語が使えるようになるという指導を目指していきたい。今後、授業を改善していくうえで、この 1 年間の研修の内容や示唆は非常に有用で、参加できたことに感謝している。

最後に、いつもあたたかい雰囲気を作り、熱意を持って研修を行ってくださったアカデミアの先生方と、研修に一緒に参加して、研修中どんなときでも助けてくださった先生方に感謝を申し上げたい。

生徒に達成感を与えるリーディングの授業

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

担当しているクラスは 2 クラス（78 名：男子 40、女子 38）である。2 クラスの雰囲気はかなり異なっている。一方は活発な生徒が多く発言も多い反面、集中できない生徒もいる。もう一つのクラスは、発言は少なくおとなしいが、全体的にまじめに授業に取り組む傾向が強い。進路については、85%が大学進学希望、15%が短大、専門学校進学希望である。30%程度が推薦・AO 入試を利用して進学する。

解決すべき課題

進学方法が多様化している。そのため、学習態度が「推薦入試で進路が決定している者」「一般入試でいわゆる受験英語を必要としている者」「いずれにかかわらず、将来のために英語が必要だと感じている者」によって大きく異なる。生徒の多様なニーズに応えるため、大学入試に通用する力を身につけさせながら、入試を超えた英語の力を育てるような授業をいかに作り上げるかが課題である。

事前調査（アンケート、テストの結果、文献研究など）

・4、5 月の間に「文法の解説は読むことに最低限必要なものにとどめる」という方針を示した。また、訳さずに要旨や論理展開を読み進めるためのフレーズリーディングについて丁寧に説明した。さらに英文を読み説くために必要な手順と思考方法を随時解説し、リスニングも行うことを伝えた。

・6 月に「授業に対する生徒の期待度」についてアンケートを実施した。項目は以下のとおりである。

①大学入試関連（8 項目）
②リーディング関連（8 項目）
③文法、語彙関連（8 項目）
④リスニング、コミュニケーション関連（6 項目）
⑤授業に対する姿勢、音読関連（5 項目）
⑥文化、教養関連（5 項目）

各項目について、「1 まったくあてはまらない」「2 あまりあてはまらない」「3 あてはまる」「4 非常にあてはまる」の 4 つの選択肢から選ばせ、それぞれの数字をポイント化した平均点や人数割合を指導の前後で比較することにした（74 名回収）。②のうち「リーディングの授業は入試に役立ちそうだ」「リーディングの授業は入試以外の勉強にも役立ちそうだ」という項目で、3 または 4 を選択した生徒はそれぞれ 93%、90%（表 1、表 2）で、いずれも高い割合であるが、ほとんどの推薦入試が終わる１１月にこれらの数字が維持されるような授業展開を考えることにした。

表１：質問項目「リーディングの授業は入試に役立ちそうだ」の回答結果

4 非常にあてはまる	3 あてはまる	2 あまり あてはまらない	1 まったく あてはまらない
39 人（53%）	30 人（40%）	5 人（7%）	0 人（0%）

表２:質問項目「リーディングの授業は入試以外の勉強にも役立ちそうだ」の回答結果

4 非常にあてはまる	3 あてはまる	2 あまり あてはまらない	1 まったく あてはまらない
35 人（47%）	32 人（43%）	7 人（10%）	0 人（0%）

リサーチ・クエスチョン

リーディングの授業で、あらゆる進路希望の生徒の満足度を維持するには、どのような指導をしたらよいか。

改善の目安：推薦入試後のアンケートで「授業は入試・入試以外の勉強に役立っている」という生徒の割合が 85%以上を維持する。

改善のための手だて

① フレーズリーディングに取り組ませれば、英語を意味のまとまりでとらえる習慣が身につき、速読力が伸びることで達成感が得られるだろう。
・意味のまとまりごとに前から読み進めるフレーズリーディングを中心に指導し、全訳を減らす。
・単語よりも語群（チャンク）で学ぶ方が、読解力、表現力双方に役立つことを教える。

② 「読む」という行為を徹底的に追求させ、発展的な読解タスクを与えれば、英文を味わいながらより深く読めるようになるだろう。
・それぞれの英文の理解にとどまらず、その文から著者がどのように論を展開させるかを「予想」させる（「読み＝先読み」を強調）。
・各セクションを読了後、スキーマを活用して次のセクションの内容を予想させる。

③ リスニングのストラテジーを指導すれば、音声言語への関心が高まり、達成感が得られるだろう。
・状況から内容を割り出すトップダウン（Top-Down）方式と、音声から語を割り出すボトムアップ（Bottom-up）方式があることを説明し、2 つのストラテジーをバランスよく用いるよう指示する。
・トップダウンの活動として、音声を聞く前に選択肢から会話を作らせるなどの活動も取り入れる。

④ 教科書の内容を発展させた発問をすれば、文化や社会に関する生徒の知的好奇心が高まるだろう。
・教科書の内容を活用し、自分の周囲、世界状況、文化や国際理解などについてさまざまな問いを投げかける。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ それぞれの「手だて」に関するアンケート（4 点満点の平均ポイント）

① 「フレーズリーディング」について

表３：フレーズリーディングについての質問項目と平均ポイント

フレーズリーディングは役に立つと思う（６月）	3.55
フレーズリーディングは役に立っている（１１月）	3.36
フレーズリーディングの活動は好きだ（６月）	3.18
フレーズリーディングの活動は好きだ（１１月）	2.86

ポイントを下げてはいるが、「役立っている」と感じている回答が３ポイントを超えている。授業中の様子からも、この方法は生徒に定着したと思われる。

② 「読む」という行為について

表４：「読む」という行為についての質問項目と平均ポイント

英文を読んで概要や重要な情報を理解できるようになりたい（６月）	3.76
英文を読んで概要や重要な情報を理解できるようになった（１１月）	2.97
英文を読んで筆者のメッセージや主張を理解できるようになりたい（６月）	3.45
英文を読んで筆者のメッセージや主張を理解できるようになった（１１月）	2.80

授業のなかでは生徒は理解している反応を示したが、アンケート結果は、生徒が自身の力で読み進める力をつけたと感じるには至っていないことを示した。

③ リスニングについて

表５：リスニングについての質問項目と平均ポイント

リスニングの力は必要だと思う（６月）	3.76
リスニングの力は必要だと思う（１１月）	3.74
リスニング活動は好きだ（６月）	2.85
リスニング活動は好きだ（１１月）	2.74

６月と１１月で大きな差はなく「必要だがあまり好きではない」という傾向があることがわかった。リスニング活動ではグループワークを実施したが、実際にやってみると驚くほど積極的に活動していた。アンケートにも「グループで正答を話し合うのがとても役に立ちました。自分で最初から考えるようになりました」というような記述が見られた。

④ 文化や社会に関する生徒の知的好奇心を高める授業展開について

表６：生徒の知的好奇心を高める授業展開についての質問項目と平均ポイント

英語圏に限らず外国の文化、歴史、社会一般に興味がある（６月）	3.08
英語圏に限らず外国の文化、歴史、社会一般に興味がわいた（11 月）	3.24
英語の授業を通して新しい知識を身につけたい（６月）	3.31
英語の授業を通して新しい知識を身につけた（11 月）	3.42
英語の授業を通して教養を深めたい（６月）	3.31
英語の授業を通して教養を深めた（11 月）	3.35

表のとおり、生徒は幅広い教養を身につけることに対して高い要求を示している。

○ リーディングの授業全体に対する評価

リサーチ・クエスチョンの目標達成を検証するためのアンケート結果は表７、８のとおりであった。

表７：質問項目「リーディングの授業は入試に役立っている」の回答結果

4 非常にあてはまる	3 あてはまる	2 あまり あてはまらない	1 まったく あてはまらない
35 人（47%）	28 人（38%）	7 人（10%）	4 人（5%）

表８：質問項目「リーディングの授業は入試以外の勉強にも役立っている」の回答結果

4 非常にあてはまる	3 あてはまる	2 あまり あてはまらない	1 まったく あてはまらない
30 人（40%）	36 人（49%）	8 人（11%）	0 人（0%）

「3」と「4」の割合の合計はそれぞれ 85%と 89%で、目安とした数字を超えていた。表７で「1」と答えた生徒を個々に見てみると、4 名とも推薦入試で進路が決まった生徒で、3 名が大学、1 名が短大への進学予定者であった。入試がなくなった段階で「必要性」を感じなくなっているようである。

教師の変化

・丁寧に全訳を示さないと生徒は理解できないと思っていたが、フレーズリーディングでも十分生徒が理解できることがわかった。生徒の力を信頼できるようになった。
・今までは「役立つ」「入試に出る」という言葉を授業で頻繁に用いてきたが、それですませずに「何に役立つのか」「なぜそのような問題が出題されるのか」という説明が大切であることを再認識した。活動の目的を明確にすることで、生徒に強い学習動機や達成感を与えられることがわかった。
・今まで、新しい活動を導入することや、授業の進め方を変えたりすることを敬遠してきたが、そのような姿勢が変化しつつあることを自分で感じる。特に大きく構えずに、今までのやり方にほんのひと味加えるだけでも、授業の展開や内容が新鮮になるということを知った。

今後の課題（次の改善点など）

・大学入試を超えた英語力（新聞、雑誌を読む・英語で議論ができるなど）を身につけたいと思う気持ちをいかに育てるかが課題である。アンケートでも、それに関する項目のポイントが低かった（表９）。

表９：大学入試を超えた英語力についての質問項目と平均ポイント

洋書や雑誌、新聞などを英語で読めるようになりたい（６月）	3.41
洋書や雑誌、新聞などを英語で読めるようになった（11 月）	1.99
外国人と英語で議論ができるようになりたい（６月）	3.26
外国人と英語で議論ができるようになった（11 月）	2.15

・授業のなかで教師が用いる英語の量がまだまだ足りない。生徒の理解力を信頼して、もう少し積極的に英語中心の授業を展開する必要がある。
・今回テストによる測定を行わなかったのは、推薦を控えて学校の成績に注意が向く前期と、入試対策に意識がシフトする後期とで、生徒の姿勢が大きく異なると考えたからである。しかし、そうした実情を踏まえても、数値の比較で能力の伸張を測る方法もあると思われる。今後機会があれば試みたい。
・英語は必要だが、好きではないという生徒が多く見受けられる。英語の勉強に対する積極性を促すような授業展開を考えなければならない。
・今回は「理解の能力」にかかわる授業改善を行ったが、今後はこの改善を踏まえて「表現の能力」を高める指導の充実を図りたい。

まとめ・感想

・何はともあれ、いろいろ新しい試みに対して、生徒がとても好意的に取り組んでくれたことに謝意を表したい。生徒の協力と積極性がなければ今回のリサーチは成立しなかったであろう。
・アカデミアの先生方からも、有益な演習、講義のほか、個人的にさまざまなご指導をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。
・教師が理想を追求する余り「受験勉強は勉強にあらず」と主張することや、逆に「入試に合格すればよい」という方向の一点張りで授業を進めるのはあまり望ましくない。生徒の意識はとても高く、「入試に英語が必要」と考える生徒も「入試に関係なく英語が必要」と考える生徒も大きな割合を占めた。目先の目標と、遠くの目標の両方を見据えて、バランスのとれた授業を展開する必要性を強く感じた。

スキーマを活用した読解・速読の指導

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

・対象は３年生文系クラス 36 名（男子 4 名、女子 32 名）で、全員が進学を目指しているが、四年制大学志望の約 8 割の生徒のうち、一般入試を意識する生徒はあまりいない。
・英語が苦手な生徒が多いが、全体の雰囲気はとてもよく、教師に対しても協力的である。ただし、自力で学習に取り組むというよりは、教師の支援を求める生徒が多い。

解決すべき課題

・英文を見ると読解をあきらめてしまったり、意欲を失っていて、はじめから読まなかったりする傾向がある。
・読む前に画像等を活用してスキーマを与えるなど、新たな指導法を試したところ、楽しそうに活動しているものの、英文を読む自信につながっているかは不明である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 事前アンケート（9 月実施：回答者数 36 名）
長文読解に対する生徒の意識と、授業の進め方の評価についてアンケート調査を行った。
従来の授業のおもな活動（ボトムアップ方式）
・英文のチャンク読み（文法解説、日本語訳の確認による内容理解）
・サイトトランスレーション（ペアワーク：英→日の同時通訳活動）
新たに導入した授業のおもな活動（トップダウン方式）
・プレリーディング活動（画像や動画等を用いたスキーマの構築、活性化）
・英文の要旨理解、情報検索読み

「英語長文を速く読めるようになりたいと思うか」

非常にそう思う	そう思う	そう思わない	まったくそう思わない
32 人（84%）	6 人（16%）	0 人（0%）	0 人（0%）

「従来の進め方がよいと思うか」

非常にそう思う	思う	そう思わない	まったくそう思わない
10 人（28%）	4 人（11%）	10 人（28%）	12 人（33%）

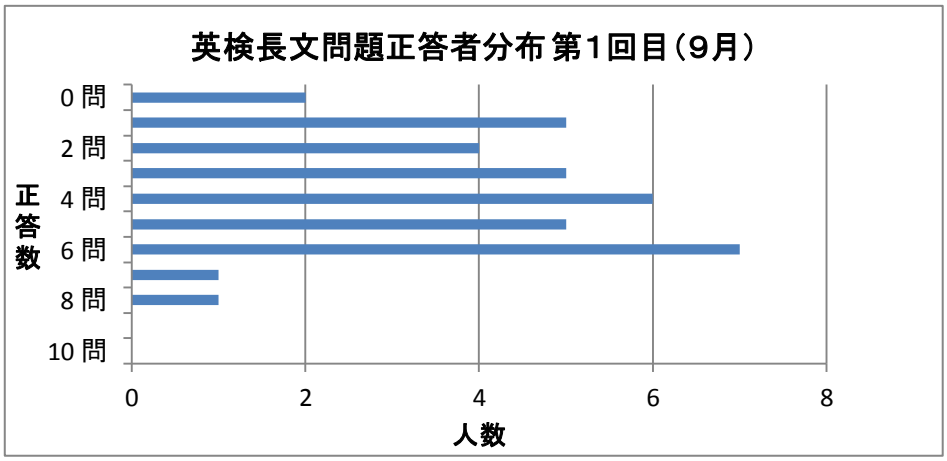
「新しい進め方がよいと思うか」

非常にそう思う	そう思う	そう思わない	まったくそう思わない
12 人（33%）	10 人（28%）	4 人（11%）	10 人（28%）

生徒全員が長文を早く読めるようになりたいと思っており、新しい指導法については約 6 割が賛同してくれていることがわかった。

○ 事前読解力調査（9 月実施）

英検準 2 級の長文問題 3 題（設問 10 問）を制限時間 30 分で行った（受験者数 36 名）。



平均正答率は 37%で、英検合格正答率と言われる 60%以上正答できた生徒は 9 名であった。全体的に初見の英文を読むことが苦手であることがあらためてわかった。多くの生徒が自力で長文を読むことに戸惑っていた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

生徒にリーディングの活動に興味や自信を持たせながら、できるだけ速く必要な情報を読み取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：アンケートで、英語が「好きである」「得意である」と答える生徒が全体の 70%以上を占め、読解テストで全体の正答率が 60%以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 時間を計測した速読練習を繰り返し、成果を記録させれば、英文を早く読むことに慣れ、学習動機も高まるだろう。

・毎回の速読練習で読解に要した時間を記録させ、進歩をモニターさせる。

○ はじめに読む目的や読み取るべき情報を明確にしたうえで英文を読む練習をくりかえせば、効率よく、より正確に読めるようになるだろう。

・プレリーディング活動で、スキーマを与えながら、読む目的を明確にする。

・英文を読む前に設問に目を通して読み取るべき情報を確認させる。

・各パラグラフから一番重要な文を抜き出させる。

○ 英文の文化的背景を取り上げて授業を行えば、英語に対する関心がより高まるだろう。
・異なる文化に属する人々の考え方、行動様式について、体験談を交えながら説明する。
・教科書とは別に、グローバルな視点で文化を取り扱った読み物を読ませる。

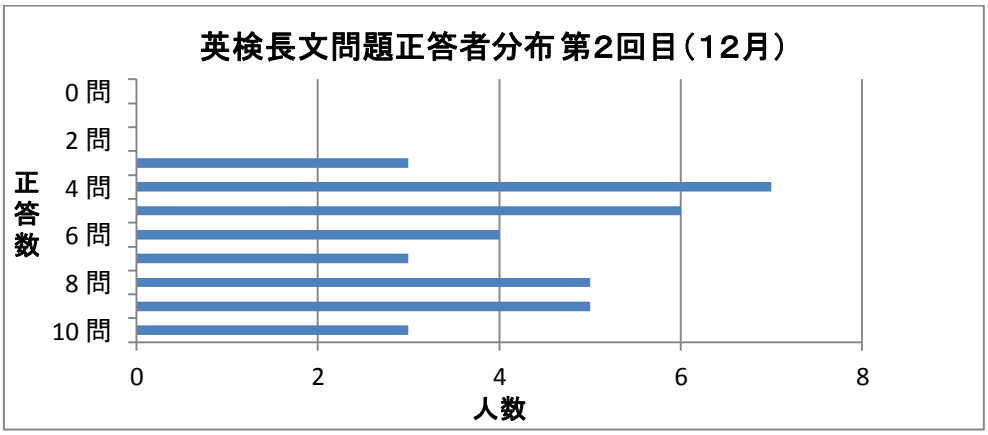
生徒の変化（途中経過、事実の検証結果など）

○ 生徒の取組状況と事後読解力調査（12 月実施）

速読練習と読み取るべき情報の明確化により、以前より主体的に取り組むようになった。また、異文化理解にかかわる体験談や逸話にも目を見張らせて興味を示していた。

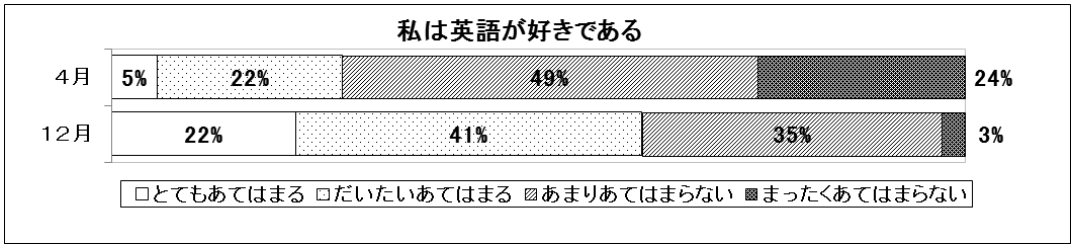
さらに、授業での成果を確認させるための英文読解演習（実用英語検定試験：週 1 回）では、慣れていくにしたがって、少しずつ自信が感じられるようになってきた。

事後読解力調査の結果は次のようになった（受験者 36 名）。

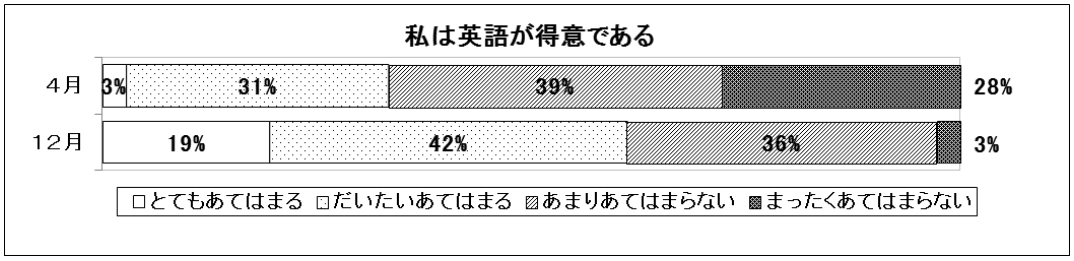


平均正答率は63%（6問以上正答：20名）であった。大幅にスコアが上がり、改善の到達目標に達した。全員が最後まで集中し、充実感に満ちた表情を見せていた。

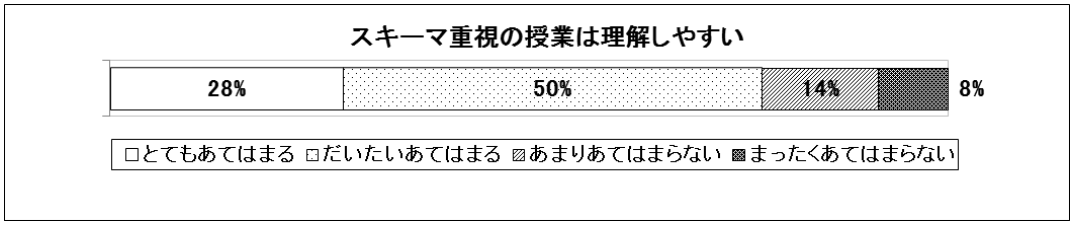
○ 事後アンケート（12月実施：回答者数36名）



「英語が好きである」生徒が6割を超えたことから、スキーマを重視した新しい指導法が、英語への興味・関心を高める一助となったと言えるだろう。



「英語が得意である」生徒は6割を超え、「まったく得意でない」という層が大きく減少したことから、この授業でより多くの生徒に達成感を与えられたと言えるだろう。



理解しやすいと感じている生徒は約8割に達した。多くの生徒がトップダウン方式の英文読解の意義を好意的にとらえていることがわかった。また、授業の感想には「目的の文章を早く見つけようとする読み方ができるようになった」などのコメントが見られた。

教師の変化

・目的や目標を明確化して活動を行うことで、より効果的な授業ができるようになった。また、今まで以上に教材研究に時間をかけるようになった。
・従来の教師主導型の授業から生徒の活動を主体とする授業に変えることができた。
・単なる言語知識の集積でなく、生徒の論理的思考力や問題解決能力の育成に一層主眼を置くようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・16名が6割の正答率を達成できなかった。今後もさらに生徒の現状とニーズを的確に把握したうえで、段階的な指導を行っていく必要がある。
・「教師が楽しくない授業は生徒にとってはもっと楽しくない」をモットーに、生徒の意欲を引き上げながら、さらに4技能を総合的に高める授業を展開していきたい。

まとめ・感想

・生徒がここまで意欲を見せてくれたことが非常に嬉しい。生徒にも教師にも「できるかもしれない」という気持ちがいかに大切かを知ることができた。
・一方的な説明に終始したり、好き勝手に活動をさせたりするだけではなく、生徒に主体的に活動させながら、教師がその前後に的確な指導を行うような授業が理想である。その実現のためには常に生徒のニーズをモニターすることが肝要であると思う。
・この研修を通じて体得したことを現場に還元し、教科全体としての指導体制の改善に寄与していかなければならないことを痛感している。

英文の要旨と構造を読み取らせるリーディング指導

科目名	英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

・対象は 1 クラス 39 人ずつの 2 クラス 78 名である。男女比はどちらも数名女子が多い程度でおおよそ半々である。
・ほとんどの生徒が大学進学を目指しており、私立中堅～難関大学を志望している生徒が多い。
・全体的に授業に積極的に取り組むが、英語に苦手意識を抱えている生徒もいる。

解決すべき課題

教科書のパートごとの内容確認として、パートの要旨をまとめた英文（パートサマリー）の空所にキーワードを補充する活動をさせていたが、多くの生徒がパートサマリーの全体像を把握せずに、空所の前後と教科書本文を照らし合わせて単語だけを探してしまい、「読んだ内容について別の英文のなかで振り返る」というこちらのねらいが外れてしまっていた。

事前の現状把握

○ サマリーライティング

パートサマリーの空所補充では内容確認をさせる効果があまりないと感じ、各パラグラフのトピックセンテンスを確認したうえで、パートサマリーを自分の英語で書くという活動を行ったところ、時間を十分に与えたにもかかわらず、なかなか書けずに、大半の生徒が途中で書くことをあきらめてしまった。

○ 部分サマリーライティング

生徒にとってすべて自分の英語でサマリーを書くことが難しかったので、上記の活動と同様に、パラグラフごとのトピックセンテンスを確認したうえで、今度は、下線部にまとまりのある語句や節を入れ、さらに文と文とのつながりを理解させるために接続詞を空所に入れるという形式にした。その結果、取り組もうという姿勢は見られるようになったが、やはり形式的に語句を探すことに終始し、英文を味わって読んでいないように思われた。また、接続詞の知識が不十分なため、本文に明示的に使われていない接続詞を補充できない生徒が多かった。

リサーチ・クエスチョン

英文の内容を味わいながら、要旨や談話構造を的確にとらえる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：部分サマリーライティングにおいて、内容と談話構造を正しく捉えられる生徒がクラスの 7 割以上になる。

※評価方法：要旨にかかわる空所 3 か所（=内容理解）、接続詞を入れる空所 2 か所（=談話構造の理解）を設けたパートサマリーの課題で、全問正答する生徒の割合を調べた。

改善のための手だて

○ 各パラグラフのメインアイディアを日本語でまとめさせれば、形ではなく内容により注意が向いて、英文を味わって読みながら、より着実な内容理解ができるだろう。

・ワークシートを用意し、パラグラフごとに下線部を設けてメインアイディアを日本語で書かせる。

○ パート全体の談話構造をとらえる活動に取り組ませれば、構造の理解が促されると同時に、接続詞の知識も定着するだろう

・同ワークシートのパラグラフ間に枠を設け、パラグラフ相互の関係性を書かせる（順接、逆接、追加、言い換えなど）。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 部分サマリーライティング正答状況

前述の、要旨にかかわる空所 3 か所（=内容理解）、接続詞を入れる空所 2 か所（=談話構造の理解）を設けたパートサマリーの課題で、全問正答する生徒の割合を調べた（2 クラス 計 78 人）。

	内容理解		談話構造の理解	
全問正答	64 人	82.1%	33 人	42.3%
誤答・未回答あり	14 人	17.9%	45 人	57.7%

内容理解にかかわる箇所では全問正答する生徒の割合が 80%を超えたが、談話構造の理解に関しては 40%を超えるにとどまった。

○ アンケート：活動の取り組みやすさと役立ち度（2 クラス 計 78 人）

Q：正解・不正解にかかわらず、最後まで取り組むことができたか。

最後まで取り組むことができた	57 人	73.1%
途中であきらめてしまった	21 人	26.9%

途中であきらめてしまった理由

・どこが大事な部分かわからなかった（13 人）

・英語で表現することが難しかった（11 人）

・パラグラフどうしの関係がわからず、接続詞を補うことが難しかった（7 人）

約 7 割の生徒が、最後まで自力で部分サマリーライティングの活動に取り組むことができた。一方、途中であきらめてしまった生徒について、その理由を見てみると、日本語を使った活動によって負荷を下げたにもかかわらず、実は要旨や構造をつかめていなかった生徒が多かったことがわかった。また、文を書く代わりに下線部に語句や節を入れ、すでに把握している接続関係を英語で書くという方式にしてあるにもかかわらず、英語で表現することが難しいと感じている生徒もまだいることがわかった。

Q：パラグラフの要旨を日本語でまとめることは、内容を把握するのに役立ったか。

大いに役立った	23 人	30%
役立った	46 人	59%
あまり役立たなかった	8 人	10%
役立たなかった	1 人	1%

「(大いに) 役立った」主な理由

・英語だけで要旨をまとめるより日本語でまとめると理解しやすかった。

・文章の要点がわかりやすくなった。

・ただ訳すより、最後に要旨を確認したことによって、より内容を理解できた気がした。

「(あまり) 役立たなかった」主な理由

・日本語で要旨を理解できても英語で表現できないから。

・和訳するだけで内容がだいたいわかったから。

・活動自体が難しくて少し混乱してしまったから。

「大いに役立った」「役立った」と答えた生徒の合計が 89%であった。またその理由から、文章の要点を整理することの重要性が理解できていることもうかがえた。一方で、日本語でまとめることが必ずしも英語で表現することにつながらない、活動自体の難しいという意見もあった。

Q：パラグラフ間の関係を考えたことは、文章の構成を把握するのに役立ったか。

大いに役立った	22 人	28%
役立った	41 人	53%
あまり役立たなかった	15 人	19%
役立たなかった	0 人	0%

「(大いに) 役立った」主な理由

・普段あまり接続詞だけをしっかり練習することがないので、知らなかった接続詞も知ることができて練習にもなるし、話の流れもつかみやすかったから。

・話の流れがわかれば、話がどう展開していくか予想がつくから。

・パラグラフ間の関係性は大事だから。

・文構成を考える力がつきそうだと思った。

「(あまり) 役立たなかった」主な理由

・わざわざ接続詞を補う必要はないと思ったから。

・受け取り方でどんな接続詞を補うかが変わると思うから。

・日本語訳があれば十分だと思った。

「大いに役立った」「役立った」と答えた生徒の合計が 81%であった。またその理由から、接続詞の学習の重要性、パラグラフ間の関係性を考えることの大切さを理解している生徒がいることがわかる。一方で、接続詞の働きの学習をすることをあまり重要だと感じていない生徒もいることがわかった。

＜考察＞

「内容と談話構造を正しく捉えられる生徒がクラスの 7 割以上になる」という目標は、「内容」に関しては達成できた（全問正答生徒の割合：82.1%）。アンケートの結果から、この生徒たちには、内容理解のために日本語でパラグラフの要旨をまとめる活動が適していたと言ってよいだろう。一方「談話構造」に関しては、全問正答できた生徒は 4 割強にとどまり目標を達成できなかった。英語の接続詞に関する生徒の知識と教師の指導が不十分であったことが、原因として考えられる。ただし、アンケートからは、大半の生徒が接続詞の学習は有益であると考えていることがわかった。また、3 割弱の生徒が活動自体に難しさを感じてしまっていたことから、より細やかなサポートをすべきだったと思った。

教師の変化

生徒の立場に立って「この活動はやりやすいか」「これをやる意味は何か」ということを自問しながら授業をするようになったと思う。今までは教師側の「この活動をやらせたい」「このレベルまでもっていきたい」という思いが先行して、生徒たちの現状の能力や思いを顧みることが少なかったかもしれない。生徒の現状の力を確認したうえで、彼らのニーズに合った目標を設定し、その達成のために授業活動を設計していくということが、いかに重要であるかを再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

・日本語の要旨を英語でまとめ直すためのサポートのしかたを工夫する。
・リーディングやライティングの活動に取り組ませる前に、よりやさしい例文で接続詞の働きや使い方を明示的に指導しておく。
・ゆくゆくは自力で英文サマリーを書けるようにするために、段階的な指導のしかたを考える。

まとめ・感想

はじめに自力で英文サマリーを書くという活動に取り組ませた時の、生徒たちの困惑していた様子が忘れられない。試行錯誤するなかで、どのような指導の段階を踏めば英文要約ができるようになるのかを、教師本位ではなく生徒たちとともに考えることができたことが大きな収穫であった。アンケートをとり、今回の手だてが効果的であったと答えた生徒が多数いたことは素直に嬉しかったが、その一方で必ずしも好意的ではない率直な意見も聞くことができ、さらによりよい授業を作っていきたいという気持ちになった。自分の指導の成果として生徒の力を測ったり、アンケートで生徒の本音を確認したりすることは若干勇気のいることだが、引き続き行っていき、本当に自分の授業が生徒の英語力向上につながっているのかということを、つねに自問し続けていきたいと思った。

学習意欲と達成感を高めるリーディングの授業

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象生徒は男子 15 人、女子 24 人の計 39 名である。明るく素直で授業にも前向きに取り組むクラスである。生徒の半数は大学進学希望だが、そのうち半数以上は指定校推薦・AO 入試・一般推薦で決まり、一般受験をするのは全体の 2 割程度である。また、全体の 4 割近くが専門学校への進学を希望し、その他は就職・短大と進路希望はさまざまである。2 学期の間に半数以上の生徒の進路先が決まる。

解決すべき課題

・初見の英文を読み解く力が弱い。
・２学期以降、指定校等ですでに進路が決まっている生徒の授業に取り組む意欲の低下が懸念される。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ 授業アンケートと考察（6 月：回答数 33 人）

① 授業で身につけたい英語の力について

リーディングの授業ということもあり、9 割の生徒が「英語を読む力を身につけたい」と回答した。しかし実際の取組状況を見ると、定期テスト等では教科書や授業で使ったワークシートを暗記して臨む傾向があり、応用問題という形で出題される初見の英文になると、点数はとれなかった。なかにははじめからあきらめてしまう生徒もいた。大多数の生徒の希望と現実の学習態度の間に大きなギャップがあった。

② 授業の楽しさについて

授業が「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」と肯定的に回答した生徒は 70%を超えているが、このうち、「楽しい」と答えた生徒は 20%にも満たなかった。大きな原因として、生徒が精読に慣れてしまっていて、教科書のはじめにあるリーディングスキルを学ぶことを目的とするレッスンで、語彙・文法の説明や内容理解に時間をかけずに速読していくやり方に、不安を抱いていたことが考えられる。自由記述でも次のようなコメントが見られた。

・先生のしゃべるスピード、解かせてもらう時間すべてが速くてついていけない。
・時間に追われている感じがして、あまり問題を解く時間がない。説明が速いのでもう少し時間をゆっくり使いたい。

リーディングの力を身につけたいと思う生徒の希望に応えるには、精読させるのではなく、さまざまなリーディングスキルを学習し、それらを使ってより長い英文に取り組ませるような授業にしなければならない。それにはまず、生徒に活動の目的をしっかりと理解させることと、学習意欲を

高める工夫が必要であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

授業に取り組む意欲を高めながら、リーディングスキルを意識して英文を読むようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：① アンケートで、授業が「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」と回答する生徒がクラスの８割以上になり、かつ「楽しい」とする生徒が増加する。

② 英文を読む際にリーディングスキルを意識できる生徒が７割以上になる。

改善のための手だて

○ 授業のなかで「楽しさ」を実感し、「達成感」が得られる授業を展開すれば、意欲的な態度で取り組むだろう。

＜楽しさ＞

・導入の工夫（身近な人物や出来事を用いて内容提示、実物や画像の活用、絵で描写するなど）

・テンポのいい授業（ストップウォッチを使って時間を管理）

・「１つの活動 10 分！」の徹底

＜達成感＞

・毎時間の授業の目標の明示

・読解問題に自力で取り組む十分な時間の確保（個人～ペアでの確認）

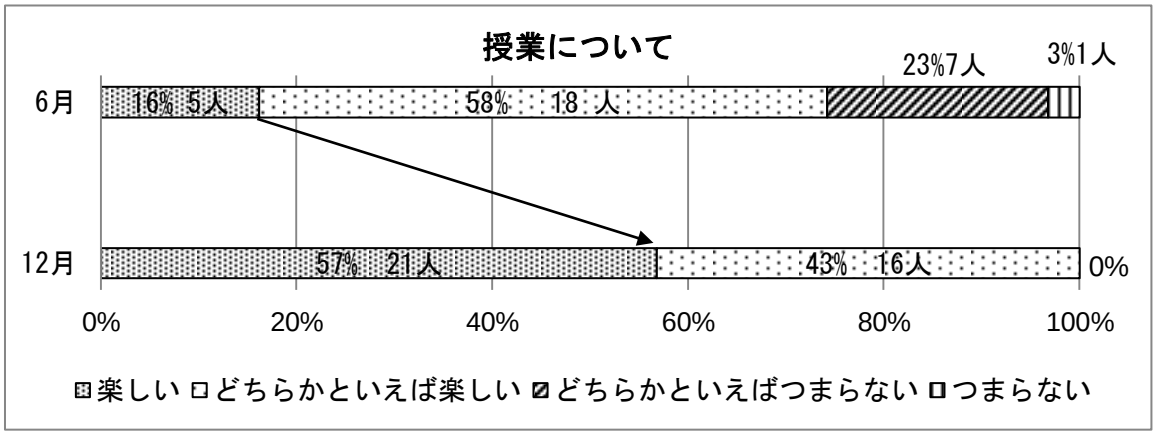
・定期テストでの論理構成を問う問題の出題

○ 英文の論理構成をとらえるリーディングスキルについて、実戦的な練習の機会を増やせばスキルの活用と定着が図れるだろう。

・教科書の英文よりもやや難易度が低い初見の英文を使って、教科書の練習問題と類似した設問を与えて練習させることで、論理構成をより速くとらえられるようにする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 授業アンケート結果の比較「授業の楽しさについて」（６月：回答数 31 人、12 月：回答数 37 人）

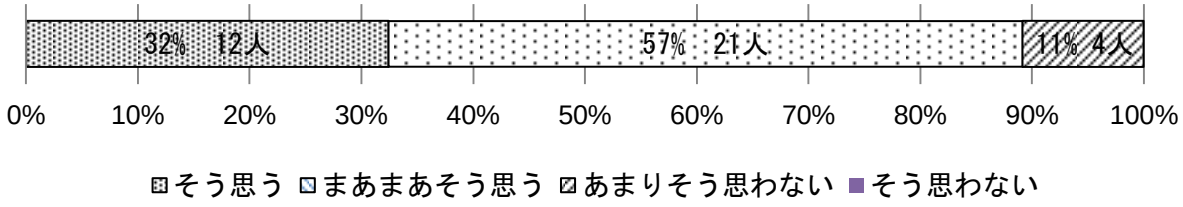


６月の結果では「楽しい」と回答した生徒の数は 20%に満たなかったが、１２月の結果では半数以上の回答を得られた。また、「どちらかと言えばつまらない」「つまらない」という否定的な回答については６月のアンケート結果では 26%もあったが、１２月の結果では 0%になった。これは、今回の授業改善に一定の成果があったと言えるだろう。授業を肯定的にとらえる生徒がクラスの８割以上になり、「楽しい」と回答する生徒が増加する、という目標は達成できた。

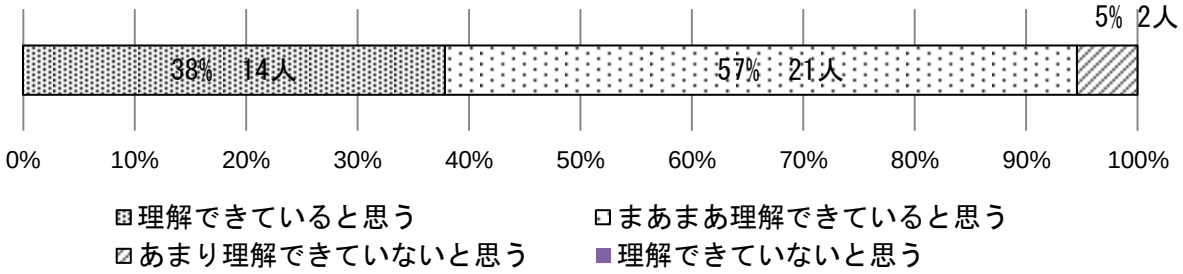
○ リーディングスキルに関する意識調査（１２月のみ：回答数 37 人）

リーディングスキルの理解や定着を図るアンケートについては残念ながら事前・事後の比較ができないが、１２月のアンケートは次のようになった。

リーディングスキルを意識して英文を読むようになったか？



英文読解に必要なリーディングスキルを理解しているか？



これらの結果から、多くの生徒が授業のなかで学んだリーディングスキルについて理解し、意識しながら英文を読むようになったと感じていると言えるだろう。自由記述としては次のような好意的なコメントがあった。

・毎時間の授業目標などきちんとしていて、何のために取り組んでいるのかがわかりやすいのでやる気が出ます。
・授業楽しいです！わかりやすいし、英文の読み方を意識して読むようになりました。
・毎回楽しく授業を受けられました。Lesson ごとの導入の時間とかすごく楽しかったです。
・先生の授業は工夫が多くて好きでした。

授業中の生徒の様子からも、授業に対する姿勢の変化は感じられた。授業の目標を毎時間提示し、生徒に授業のねらいを意識させることで、授業に対して積極的に臨む姿勢が見られるようになった。また、リーディングの力を身につけたいという生徒の声から、リーディングスキルの実戦的な練習の機会を増やしたことで、多くの生徒が、リーディングスキルについて理解し、意識して英文を読むようになったと実感できたのだと思う。

教師の変化

・授業に対して今回はどのような工夫をしようか、生徒が求めているもの、必要なものは何かといった視点で授業設計をするようになった。
・生徒のアンケートの結果や自分の授業ビデオを見ることによって、改めて自分の授業と向き合うことができた。客観的に授業を見直すことで、うまくいっていること、うまくいっていないことがはっきりわかり、改善の必要性を強く感じることができた。
・今回の授業改善をきっかけに、授業の進め方やテストの作り方など、同じ科目を担当している先生方と話し合いをする機会が以前より増えた。そのなかで意見交換をしたり、アドバイスを頂いたりすることもあり、とても勉強になった。
・毎時間の授業の目標を生徒に提示することで、ポイントを絞った授業ができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・事前に教材や言語活動の目的と効果を教師がしっかりと把握し、担当の教師同士で共有し、生徒に十分な説明をして納得させたうえで授業を進めていかなければならない。
・年度途中から、論理構成を意識させた読解を軸に授業を行ったが、そのスキルを習得させるには十分な時間をかけることができなかった。もっと早い段階から、リーディングスキルを意識して英文を読ませる機会を増やすことが必要である。

まとめ・感想

今回のリサーチでは、リーディングの授業をテーマにして、試行錯誤しながら授業の進め方を考えてきた。授業について考える時間は以前に比べて断然増えた。そのなかで、何か工夫をして授業に臨むと、生徒もそれに応えてくれるものだとわかった。教師が、生徒の反応を想像し楽しみながら授業の準備をすることで、生徒にもそれが伝わり、学習意欲を高めることにつながると思う。「授業が楽しい」と回答した生徒が後期になって増えたことは本当にうれしかった。教師として生徒と向き合う以上は、つねに授業改善の姿勢をもっていなければならないとあらためて思った。

本研修では、アカデミアの講師の方々のご指導はもちろん、参加されている先生方の英語教育に対する熱意に触れて、英語教師としてプロになるとはどういうことなのかをじっくり考えることができた。このような意識はこの研修に参加していなければ持てなかったかもしれない。多くのことを学ばせていただいたことに心から感謝したい。これからも自身の英語力の向上を図りつつ、生徒の求める授業に近づけられるように省察的に授業改善を続けていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

静　哲人.(2002).『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店
薬袋　洋子.(1993).『英語教師の四十八手＜第5巻＞　リーディングの指導』研究社
金谷　憲.(2002).『英語授業改善のための処方箋ーマクロに考えミクロに対処する』大修館書店
斎藤　栄二.(1998).『これだけは知っておきたい 英語授業成功への実践』大修館書店

ルーブリックを活用した自由英作文指導

科目名	英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

クラスの人数は 40 名（男子 18 名、女子 22 名）である。落ち着いた雰囲気のなかで前向きな姿勢で勉学に取り組むことができるクラスである。英語学習に対する関心は比較的高い生徒が多いが，英語で自己表現することについてはやや消極的な姿勢も見られる。大学進学希望者がほとんどである。

解決すべき課題

○ 生徒が抱える課題

２年生の１学期では、学習した文法項目や単語等を活用した英作文活動を展開してきた。しかし、生徒によって書く量は異なり、書く内容も単調化してきた。さらに、生徒は英作文の力を伸ばすためにどの部分を努力すればよいのかという振り返りができないまま、また、向上の度合いを自身でも確認できないまま活動に取り組んでいた。

○ 教師が抱える課題

これまでの英作文指導では、英文を書かせて回収し、文法・語法の大きな誤りを訂正してコメントを添えて返却したあと、よく書けている作品を口頭発表させたりしていた。そして、誤りの多少や書く内容の工夫の度合いによって大雑把に ABC の 3 段階の評価を与えていた。しかし、生徒の英作文の能力の上達具合が感覚的にはある程度わかりつつも、生徒が書いた英作文に対する教員側の評価は主観的であり、客観性・一貫性のないものであった。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ ２年１学期段階での現状（５月～７月）

生徒の英作文の力を把握するために、学習した文法項目や単語等を活用して英語で自分の考えや意見を書く活動を定期的に行った。1 文だけ書いて終了する生徒がほとんどであった。2～3 文を書く者もいたが、内容的な深まりの乏しい英作文が多かった。さらに、主語と述語の構造ができていなかったり、時制が混在したりする英文も少なからず見られ、何を言いたいのかが不明な英文も少なくなかった。英語で書こうとする意欲はあるものの、具体的にどのように書けばよいのかわからない生徒が多かった。比較的よく書けていると判断した作文でも、次のような初歩的なものであった。

（例１）Some like dogs, while others like cats.　In my case, I like dogs because they are cute.

（例２）It is exciting to be able to speak English.　-Why?　Because I can talk with a lot of foreigners.

○ 事前アンケート：生徒の英作文活動に対する意識（７月）

１学期の期末試験が終了した段階で、英語Ⅱの授業に関するアンケートを実施し、学習した表現をもとにした自由英作文の活動と、その発表活動について感想をたずねた。

① 授業で学習した英語表現を活用して自由英作文を作る活動についてどう思うか。

とてもよい 11 人(27.5%) よい 26 人(65.0%) あまりよくない 3 人(7.5%) とてもよくない 0 人(0.0%)

② 自由英作文を授業中に発表することについてどう思うか。

とてもよい 5 人(12.5%) よい 27 人(67.5%) あまりよくない 6 人(15.0%) とてもよくない 2 人(5.0%)

授業中の英作文にかかわる活動に対する生徒の評価は、想像したよりはるかに高かった。活動について「とてもよい」「よい」と答えた生徒は「英作文」で 38 人(95.0%)、「発表」で 32 人(80.0%)になった。生徒の英作文の対する関心・意欲は高いものがある。その関心・意欲をいかにして効果的な英作文活動に結びつけるかが課題である。特に、自分の考えや意見とその理由を論理的に述べるために、主題文 1＋支持文 3＋結論文 1 を意識した 5 文が書ける力を身につけさせたい。

リサーチ・クエスチョン

自分の考えや意見を、英語らしい構造の、まとまった英文で書けるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：5 文パラグラフの評価ルーブリック（自作）による評価が A の生徒が、クラスの 7 割以上（40 人中 28 人）になる。

<table>
<tr><td></td><td>評価の観点</td><td colspan="5">基準（カッコ内の数字は得点）</td></tr>
<tr><td>1</td><td>文の数</td><td>5 文(30)</td><td>4 文(20)</td><td>3 文(10)</td><td>2 文(5)</td><td>1 文(1)</td></tr>
<tr><td>2</td><td>指定語の使用</td><td colspan="2">使用している(10)</td><td colspan="3">使用していない(0)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3</td><td>a)感想・意見の記述</td><td>感想・意見とその理由を書いている。(40)</td><td colspan="2">感想・意見だけ書いてある。(20)</td><td colspan="2">感想・意見も理由も書いていない。(10)</td></tr>
<tr><td>b)明瞭性（文法・語彙・構造を含む）</td><td>内容が＊よく理解できる。(20)</td><td colspan="2">内容が理解できる。(10)</td><td colspan="2">内容の理解が困難である。(5)</td></tr>
<tr><td colspan="7">A 評価：100（非常に優れている: Really well）
B 評価：81～99（十分満足できる: Quite well）
C 評価：76～80（だいたい満足できるが、未達成の部分がある: OK）
D 評価：75 以下（努力が必要である: Not so well）</td></tr>
</table>

＊「よく」: 理解に支障をきたす global error がなく、論理構造がわかりやすい。

global error の例:

「主語＋動詞」構造の欠如（* I φ interested in music.）

接続詞の誤用（I like dogs. * Because they are cute.）

改善のための手だて

○ 英文パラグラフ(5 文)の構造をくりかえし指導すれば、自分の考えや意見を論理的に書けるようになるだろう。

○ 理解に支障をきたす global error について具体例を示しながらくりかえし指導すれば、より伝わりやすい英文を書けるようになるだろう。

＊上記の手だてを実施するための補助ツールとしてルーブリックを使用する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ ルーブリックを活用した英作文活動（5 回：９月～１１月）

英作文活動をする時に 4 つの条件を課すことによって、どのような点に注意して書けばよいのかが明確になり、生徒はより意欲的に取り組むようになった。評価が A の生徒がクラスの 7 割以上になるという目標を 4 回目に達成できた。

実施日	A	B	C	D
① 9/20	7 人（17.5%）	20 人(50.0%)	11 人(27.5%)	2 人(5.0%)
② 10/10	16 人（40.0%）	15 人(37.5%)	7 人(17.5%)	2 人(5.0%)
③ 10/17	27 人（67.5%）	9 人(22.5%)	4 人(10.0%)	0 人(0.0%)
④ 10/30	29 人（72.5%）	8 人(20.0%)	3 人(7.5%)	0 人(0.0%)
⑤ 11/12	31 人（77.5%）	7 人(17.5%)	1 人(2.5%)	1 人（2.5%）

評価Ａの作品例（第５回）＊下線部は指定語

生徒１　I read Bethany's surprising story. / She had her left arm bitten off by a Tiger Shark. At first I thought she gave up her lifelong dream. / To my surprise, she didn't abandon her eagerness and courage to continue to pursue her dream. / So, no matter how many really terrible experiences I have, I will overcome them because I got courage from Bethany.

生徒２ I read a good story and I think it is beneficial to my life. / Bethany had eagerness and courage to continue to pursue her dream. / I have not decided what I will do in the future yet. / I want to have a wonderful dream like Bethany, because I think a dream helps people to overcome adversity no matter how great it is. / To have a dream is wonderful and the story has taught me Bethany is wonderful too.

＊いずれも自分の考えや意見とその理由が指定語を使用しながら 5 文で明確に述べられている。理解に支障をきたす global error もない。

○ 事後アンケート（１１月）

① 評価ルーブリックについてどう思うか。

とてもよい 13 人(32.5%)　　よい 27 人(67.5%)

あまりよくない 0 人(0.0%)　　とてもよくない 0 人(0.0%)

＜自由記述＞ 自分の英作文の改善点がわかる。11 人(27.5%)

② 論理的に自分の考え・意見とその理由を書く練習についてどう思うか。

とてもよい 19 人(47.5%)　　よい 21 人(52.5%)

あまりよくない 0 人(0.0%)　　とてもよくない 0 人(0.0%)

＜自由記述＞ 英作文だけではなくて、日本語で書く入試の小論文にも役立つ。13 人(32.5%)

③ ２年の１学期に比べて、現在の自分の英作文力についてどう思うか。

とても伸びた 1 人(2.5%)　　伸びた 24 人(60.0%)

変わらない 9 人(22.5%)　　わからない 6 人(15.0%)

＜自由記述＞ 自分の言いたいことを英語で表現できるようになってきた。7 人(17.5%)

事後アンケートの結果、生徒の英作文活動にとってルーブリックが極めて効果的であることが判明した。また、論理構造を意識して書く有用性が英語のみに限定されないと考える生徒が目立った。さらに、過半数の生徒が英作文力の向上を実感できたことは大きな成果であった。

○ 英作文以外への波及効果

「自分の考え・意見・感想、その理由を論理的に書く」という習慣の確立が、生徒の英文読解力の向上にもつながっていった。また、英作文で身につけた論理性への意識が、日本語で小論文を書くときにも役に立っているという声もあった。

教師の変化

・ルーブリックの評価の観点を考えることで、何を指導しなければならないかが明確になり、客観性・一貫性のある評価によって、生徒により効果的なフィードバックを与えられるようになった。

・生徒に毎回のように英語による自己表現をさせている以上、教師もその指導に足る力をもっていなければならないと思うようになり、今まで以上に自分自身の英語力向上に努力するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・生徒の英作文にかかわるニーズ（入試、仕事、日常的なコミュニケーションなど）を精査し、それに応じてルーブリックを洗練しながら、より効果的な指導を目指したい。

・ルーブリックを活用した英作文の活動と評価の研究を、他の英語科の先生方とともに実践していきたい。

まとめ・感想

英作文指導をするなかで、つねづね感じていたことがある。それは、生徒が書く、質・量ともにさまざまな英作文を客観的に評価することの難しさである。どうすれば客観的で一貫性のある評価ができるだろうかという悩みを抱えていた。そのような時に、アドヴァンスト研修で授業改善プロジェクトに関しての個人面談があり、ルーブリックを導入した英作文指導をしてみてはどうかとアドバイスを受けた。自分なりに工夫して、ルーブリックを作成し、生徒が書いた英作文を客観的に評価するツールとして活用し始めた。生徒は、前述した４つの条件をクリアしながら英作文活動に取り組んだ。具体的な条件や目標が設定されることによって、予想以上の数の生徒が意欲的に取り組むことがわかった。また、自分の英作文に対する評価が客観的になされることにより、次の英作文活動ではさらによい内容のものを書こうとする向上心が、明らかに芽生えてきた。教師の少しの努力と工夫が、生徒の大きな学習意欲の向上に結び付くという貴重な教育的体験をした。

この１年間のアドヴァンスト研修に参加できたことを、とても幸運だと考えている。英語を言語的、文化的、社会的その他のさまざまな側面から考える、絶好の機会を与えられたからである。英語ならびに英語教育に対する極めて深い造詣を持つ、アカデミアの講師の方々の熱意あふれる講義や励ましは、自分自身の英語教育に対する姿勢を正してくれた。心から御礼申しあげたい。また、この研修で出逢えた、授業改善に対して極めて意欲的な他校の先生方から、本当に多くのことを学ぶことができた。アドヴァンスト研修は、実り多く非常に贅沢かつ高水準の研修であった。

授業改善にあたって参考にした資料等

高浦勝義. (2004).『絶対評価とルーブリックの理論と実際』黎明書房

サマリーライティングを用いた技能統合型授業

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は１学年の３クラス（122 名：男子 58 名、女子 64 名）である。１クラスはホームルーム担任のクラスであり、明るく活発で、生徒同士の仲もよい。他の２クラスのうち１クラスは、向学心が強く理解力があり、取組みもよい。もう１クラスは、やや消極的な雰囲気だが、作文や発表などの表現に工夫と意欲が感じられる。全体で８割程度の生徒が、大学・短大への進学を希望している。

解決すべき課題

基本的に英語で授業を行っているが、文構造の解説などに充てる時間が多く、「要旨をつかむ」等、本来的な意味での英文を「読む」活動や、「書く」「話す」などの自己表現活動、教師による本文の導入や生徒による発表活動を通じた「聞く」活動など、４技能を総合的に伸ばす授業になっていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ ５月実施アンケート（抜粋） ＊回答人数 計 121 名

４：楽しい／理解できた／(４技能)ぜひ伸ばしたい／好き

３：どちらかといえば楽しい／まあまあ理解できた／(４技能)できれば伸ばしたい／わりと好き

２：どちらかといえばつまらない／あまり理解できなかった／(４技能)それほど伸ばしたくない／あまり好きでない

１：つまらない／理解できなかった／(４技能)伸ばす必要を感じない／嫌い

	４	３	２	１
授業の楽しさ	23 名（19.0%）	61 名（50.4%）	28 名（23.1%）	9 名（ 7.4%）
学習内容の理解	22 名（18.3%）	69 名（57.5%）	26 名（21.7%）	4 名（ 3.3%）
読む能力向上への意欲	76 名（62.8%）	40 名（33.1%）	4 名（3.3%）	1 名（ 0.8%）
書く能力向上への意欲	79 名（65.3%）	38 名（31.4%）	3 名（2.5%）	1 名（ 0.8%）
聞く能力向上への意欲	85 名 （70.2%）	33 名（27.3%）	2 名（1.7%）	1 名（ 0.8%）
話す能力向上への意欲	81 名 （66.9%）	36 名（29.8%）	2 名（1.7%）	2 名（ 1.7%）
自分で文を作る活動	13 名（10.7%）	38 名（31.4%）	45 名（37.2%）	25 名（20.7%）

４技能を伸ばしたいという意欲は高く、４・３を合わせると、どの技能でも 95%を超えている。自由記述からは、英語で行う授業を、「わかりやすくて面白い」「英語でも理解できる」という生徒がいる一方、「質問内容やどこの説明かがわからなくなるときがある」など、適切な英語使用や、明確な指示と説明に課題があることがわかった。授業の活動としては、音読やペアワーク、グループワークのように、「話し合いがためになる」「参加型の授業が楽しい」などのコメントから、おおむね歓迎されていると判断できるものもあるが、活動時に「一斉に手が挙がるとあててもらえない」など、言語活動の進め方についての問題点も浮かび上がった。

リサーチ・クエスチョン

英文の中心的な内容を的確につかみ、積極的に英語で自己表現をする力を身につけさせるにはどのような指導をしたらよいか。

改善の目安：定期テスト中のサマリーや意見文を書かせる問題で、6 点中 4 点以上を取れる生徒の数が、クラスの 7 割を超える。

改善のための手だて

○ 要旨をつかむ読解活動を導入すれば、日本語訳に頼らずに英文を理解する習慣がつくだろう。

○ サマリー活動を導入すれば、読み取った情報を活用しながら、無理なく自己表現活動に取り組めるだろう。

○ 完成したサマリーの口頭での発表活動を導入すれば、自己表現への意欲が高まるだろう。

○ サマリーを修正する活動を導入すれば、英語を書くための文法力も身につくだろう。

＜生徒と共有した学習目標（９月～）＞

① まずは、ヒントなしで原文と向き合い、黙読で、大事な内容（大意）をつかむ。

② 日本語訳に頼らず、やさしい英語に書き換えた本文内容との対比から理解する。

③ 目で見てわかるように、内容を自分なりにまとめることで、より語彙や表現に習熟する。

④ 簡潔でわかりやすいサマリーを作り、理解したことを自分のことばとして表現できる力をつける。

⑤ グループワークやペアワークを、協働して考えを伝え合う機会として大事にする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ １２月実施アンケート（抜粋）　＊回答人数計 118 名

４： 楽しい／(４技能)ぜひ伸ばしたい／役に立った

３：どちらかといえば楽しい／（４技能)できれば伸ばしたい／まあまあためになった

２： どちらかといえばつまらない／（４技能)それほど伸ばしたくない／　あまりためにならない

１：つまらない／(４技能)伸ばす必要を感じない／役に立たない

	4	3	2	1
授業の楽しさ	25 名（21.2%）	64 名（54.2%）	22 名（18.6%）	7 名（ 5.9%）
学習内容の理解	15 名（12.7%）	54 名（46.2%）	42 名（35.9%）	7 名（ 6.0%）
読む能力向上への意欲	65 名（55.6%）	42 名（35.9%）	8 名（ 6.8%）	2 名（ 1.7%）
書く能力向上への意欲	66 名（56.4%）	40 名（34.2%）	10 名（8.5%）	1 名（ 0.8%）
聞く能力向上への意欲	59 名　（50.4%）	47 名（39.8%）	9 名（7.6%）	2 名（ 1.7%）
話す能力向上への意欲	72 名　（61.0%）	38 名（32.2%）	5 名（4.2%）	3 名（ 2.5%）
語彙クイズ	23 名（19.7%）	58 名（49.6%）	32 名（27.4%）	4 名（ 3.4%）
音読ペアワーク	21 名（17.8%）	68 名（57.6%）	22 名（18.6%）	7 名（ 5.9%）
ディクテーション	30 名（25.4%）	58 名（49.2%）	26 名（22.0%）	4 名（ 3.4%）
やさしい英語で読む活動	37 名（31.4%）	45 名（38.1%）	26 名（22.0%）	10 名（ 8.4%）
Gist を作る活動	30 名（25.4%）	58 名（49.2%）	26 名（22.0%）	4 名（ 3.4%）
サマリーを作る活動	28 名（23.7%）	68 名（57.6%）	18 名（15.3%）	4 名（ 3.4%）

全体では、授業が「楽しい」という生徒の割合が、わずかながら増えた。特に５月に最も低い評価だったクラスから、最も高い評価を得られたことが嬉しかった。しかし 4 技能を伸ばしたい意欲は、やや下がり、内容を「理解できた」という生徒の割合は、４・３を合わせても６割に満たない。自由記述には「ペースが速すぎるときがある」との指摘が多数ある。「わかった、できた」という達成感があってこそ意欲がわくということにもっと目を向け、ハンドアウトの量を減らして負担感を軽くしたり、生徒が理解できているかどうか確認する時間を、毎時の授業で確保したりする必要があったと痛感した。活動のうち「やさしい英語で読む活動」については、自由記述に「対比でより内容が理解できた」など多数の支持意見が見られる一方、「対比が難しくてわからない」「和訳の授業に戻してほしい」という声も少数ながらある。より多くの生徒が、英語を英語として読めるという達成感をもてるように、活動時の発問やヒントの出し方を工夫するなど、さらに改善を加える必要があると感じた。「Gist を作る活動」「サマリーを作る活動」では、英文を書くということに対する抵抗感が大幅に少なくなったようである。これらの勉強方法が「試験対策でも活きた」という生徒も多い。

○ 各活動の内容と、生徒の取組状況

＜語彙学習活動＞

新出語句について、意味を二者択一で選んだり、やさしい英文による定義を手掛かりに語彙を推測したりする形式で提示した。クリスクロスゲームで活用すると、語彙を予習してくる生徒が増えた。

＜ディクテーション＞

読解のためのスキーマを与えるために、教師によるオーラルイントロダクションの一部や、教科書 CD の英文を書き取らせた。集中して聞き取る様子が見られ、答えを生徒同士で確認し合う習慣も身についた。

＜黙読による概要把握＞

本文黙読によりトピックセンテンスや、要点の抽出をさせたが、生徒は集中して取り組んだ。

＜やさしい英語による読解＞

本文と、本文の Easy version を併記して読解活動を行った。文法説明や内容把握のための英問をあわせて付記した。Easy version が、より平易な英語で表現するためのモデルになり、要約のためのリソースとしても役立ったようである。

＜Gist とサマリーを書く活動＞

グラフィックオーガナイザー（内容・構成を図示したもの）を自分で作る“Catch the Gist”という課題を宿題で課し、さらに１文のパートサマリーを書かせた。イラストを巧みに用いるなど、毎回楽しい作品が数多く出されるため、クラスごとに複数の作品を選び、ハンドアウトにまとめて返却したところ、より視覚にも訴える Gist やわかりやすく表現の優れたサマリーを作ろうと課題の取組にも熱が入るようになった。「楽しいし、内容理解や語彙学習の助けとなる」と言う生徒の数も増えた。

＜音読ペアワーク＞

本文をペアで１文ずつ交互に読ませ所要時間を計った。互いに発音やアクセントを教え合うよう指導した。「音読するうちに内容がわかってくる」という生徒もいた。

＜サマリーの発表とサマリーの修正活動＞

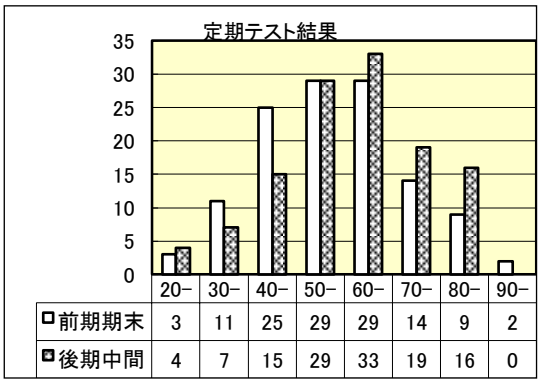
4 人のグループメンバーが、クラス内のレッスンサマリーからよいと思う表現を集め、各自が持ち寄ったものと合わせてよりよいレッスンサマリーを相談して作り、発表するという活動を行った(Summary Collection)。さらに、発表したサマリーを修正する活動も行った(Summary Correction)。Summary Collection では、①生徒が一斉に黒板の方を向いて座っているときに指示を出す、②グル

ープ内で Leader（活動の統括）、Writer（発表者のための原稿作成）、Judge（活用する表現の判断）、Reporter（発表）の役割分担をする、③内容ごとに活動時間を制限する、の 3 点に留意した。これらが緊張感と活気をもたらし、どのグループも工夫のあるサマリーを作り、発表するようになった。

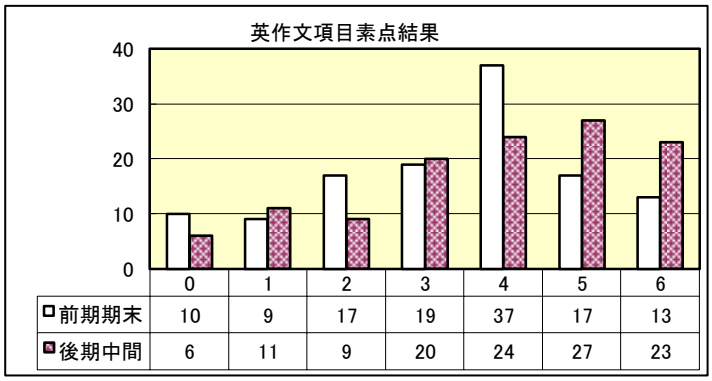
以上の各活動については、多くの生徒が「自分で考えなければできないので、自分で考える力がついた」と感想を述べている。

定期テストの平均は前期期末が 57.5 点、後期中間が、61.9 点で、後期中間では 90 点以上の生徒数が 0 だったが、70 点以上の生徒数が 8%増加し、40 点以下の生徒数は 11%減少している。

英作文問題で基準（6 点中 4 点）に達した生徒の割合は、前期期末で 54.1%（平均 3.37 点）だったが、後期中間で 61.9%（平均 3.82 点）になり、目標の 7 割には及ばなかったが増加した。2 回の定期テストにおける英作文問題の平均点の差について t 検定を行ったところ有意差が見られた（$p < .05$）。



	20−	30−	40−	50−	60−	70−	80−	90−
前期期末	3	11	25	29	29	14	9	2
後期中間	4	7	15	29	33	19	16	0



	0	1	2	3	4	5	6
前期期末	10	9	17	19	37	17	13
後期中間	6	11	9	20	24	27	23

教師の変化

○ ICT の活用

英文の理解を助けるために、これまでも写真やグラフなど、印刷した視覚資料の提示を心がけてきたが、プレゼンテーションスライドの活用により、動画を使って実際の英語使用場面を提示することができ、さらに生徒の興味・関心を高めることができた。また、スライド使用で目標を明示しやすく、授業の流れを周到にコントロールできるため、言語活動をより効果的に行えるようになった。

○ 同僚との協力

学年を担当する 3 人が互いの言語活動を共有できるようになった。授業展開のバリエーションが増え、同僚のやり方を参考に改善を試みる姿勢が身についた。校内研究授業でも協力して指導にあたり、生徒の発表を共有財産として、教科として本校生徒の能力のイメージをつかむことができた。

今後の課題（次の改善点など）

・教材を精選し、生徒に配布するハンドアウトが多すぎないようにしたい。
・読解活動をテンポよく行うことで、生徒がより多くの英文に触れるように努めたい。
・生徒が主体的に、英語でより深く考え、発話しあい、成長を実感できる活動を工夫したい。

まとめ・感想

授業観察と、アンケートやテスト結果などのデータ分析を通して、直感に頼るばかりだったこれまでの取組を根本的に見直すことができた。この研修機会を得られたことで、拙い歩みながら、目標と改善点を少しずつ明確に見いだせるようになってきたことに心から感謝している。今回に限ることなく、つねに生徒の意識や能力を把握しながら、継続して研修を積み重ね、授業改善に努めていきたい。

ルーブリックを活用したサマリーライティングの活動

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

・対象クラスは 2 クラス計 77 名（男子 42 名、女子 35 名）である。
・授業態度は良好だが、やや受身であり、自律的に家庭学習する習慣もあまりついていない。
・基礎的な文法や語彙はおおむね身についており、教科書の音読や、ペア活動には積極的に取り組む。
・ほとんどの生徒が、卒業後は大学か短期大学への進学を希望している。

解決すべき課題

・英文を 1 文ずつ日本語に置き換えることはできるが、パラグラフの要旨や、パッセージ全体として筆者が言いたいことなどをたずねると答えられない生徒が多い。
・英語で自己表現することに慣れていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

○ これまでの指導方法の見直し

旧学習指導要領下の「英語Ⅰ」の授業の中心は、教科書本文に書かれていることを理解する活動であったが、その理解も表面的・断片的で、要旨を自分のことばで言い換えられるほどしっかりとした理解まではさせていなかった。また、「書く」「話す」という表現活動については、おもに「オーラルコミュニケーションⅠ」で行っていた。今年度「コミュニケーション英語Ⅰ」を担当するに当たり、自己表現につながるより深い読解活動に取り組ませ、生徒の読解力と表現力を高めたいと思った。

○ アンケート調査：この授業で伸ばしたいと思う英語の力（回答数 77 名）

	ぜひ伸ばしたい	できれば伸ばしたい	それほど伸ばしたいと思わない	伸ばす必要を感じない
聞く力	44 人（57%）	31 人（40%）	2 人（3%）	0 人（0%）
読む力	48 人（61%）	27 人（35%）	1 人（2%）	1 人（2%）
話す力	53 人（69%）	22 人（28%）	1 人（2%）	1 人（2%）
書く力	48 人（63%）	24 人（31%）	4 人（5%）	1 人（2%）

生徒たちも読解力と表現力の両方を伸ばしたいと思っているということがあらためてわかった。

○ パートサマリーを書く活動

夏期休業前までは、複数文でのパートサマリーを書かせていたが、分量制限がないため、教科書本文からの切り貼りのような作品が多かった。メインアイディアをとらえて、できるだけ自分の英語でまとめさせたい、という思いから、「1 文で」という指示をしたが、生徒はこの制約に慣れずに苦労していた。and や but を用いて複数の文をつなげて 1 文（重文）にする生徒もいた。

改善の目標

英文の要旨を的確に理解し、適切かつ簡潔な英語でそれを表現する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：各パートのメインアイディアを、自分の英語を使って、S+V 構造を持つ１文の英語で表現できる（ルーブリックによる総合評価が A になる）生徒が８割以上になる。

改善のための手だて

○ 教科書本文の要約を英文で書く活動を各パートで行えば、英文の要旨を把握する力と、それを自分の英語で表現する力の両方が身につくだろう。

・各パートの読解後に、教科書、ワークシートを参照しながらパートの要旨を英語で書かせ、評価したあと記録させる。返却した作品はポートフォリオにして整理させる。

・語彙を画像とともに提示したり、読解後にくりかえし音読活動を行ったりして、語彙や表現の定着を促し、要約文ですぐに再利用できるようにする。

・１文にまとめる手段の一つとして関係詞（制限用法、非制限用法）の指導を重点的に行う。

・数枚のイラストのみをもとに、要約文を相手に伝えるペアワークを行う。

・教師が選んだよい作品について紹介、解説したり、グループでよい作品を選んで板書させ、それを講評したりする、クラス全体での評価活動も行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 自作評価ルーブリックによるパートサマリーの評価

要約は下のようなルーブリックで評価し、①～③の条件を満たすものを総合評価 A（合格）とした。

① Ⅰが A　② Ⅱ・Ⅲが B 以上　③ Ⅱ・Ⅲのどちらかが A

評価項目	評　　価
Ⅰ　内容	A　パートの内容で重要を思われる点を大体拾いあげている。
	B　パートの内容で重要を思われる点を部分的に拾いあげている。
	C　パートの内容で重要を思われる点を拾いあげていない。
Ⅱ　文法・語法	A　S＋V 構造が適切で文が整い、意味が伝わる。
	B　S＋V 構造などに少し誤りがあるが意味は伝わる。
	C　S＋V 構造などに少し誤りがあり意味が伝わらない。
Ⅲ　自分の英語	A　本文の引用ではなく自分の言葉で表現している部分が一箇所以上ある。
	B　本文の引用のみで表現している。
	C　本文の引用を不適切に使用している。
総合評価	AAA AAB ABA　→ A
	ABB AAC ABC BAA BAB BBA BBB BBC　→ B
	ACA ACB ACC BAC BCA BCB BCC CAA
	CAB CAC CBA CBB CBC CCA CCB CCC　→ C

2クラス全体の合格者（総合評価A）の割合の推移

	１回目	２回目	３回目	４回目	５回目	６回目	７回目	８回目
２組＋３組	6.8%	14.5%	52.7%	50.0%	59.2%	79.7%	80.6%	80.3%

合格者の割合は回を追うごとにほぼ順調に伸び、目標の８割を達成することができた。

○ 関係詞の指導効果

生徒の作品を見ると、積極的に関係詞を使って、必要な情報を１文のなかに適切に収めているものが増えてきた。

○ サマリー評価記録の効果

毎回の評価を記録することで進歩を確認することができるため、生徒は自分の評価をより意識するようになり、よいサマリーを書こうとする意欲が見えてきた。

○ クラス全体でのサマリー評価活動の取組状況

グループ活動では、お互いの作品を熱心に読み、自分のサマリーとの違いを見比べたりする様子が見られた。さらに全体で共有することで、共通する誤りを確認したり、再度内容を深く振り返ったりすることができた。

○ アンケート調査：パートサマリーの活動の効果について（回答数77名）

「パートサマリーは役に立ったと思うか」という問いに対して、82%の生徒が「要約はためになる（力がつく）活動だ」と回答した。さらに感想を自由記述させたところ、「要約することで文の内容理解が深まった」、「文章が書けるようになった」などの肯定的なコメントが多かった。「要約をすると力がつくので、今後も続けてほしい」「評価を見るのが楽しみだ」「よい作品として選ばれるとうれしくてやる気が出てくる」などの意見もあった。生徒たち自身が要約の活動の意義がわかったことによって、積極的に取り組み、指導効果も上がったのだと感じた。

○ 生徒の作品例（９月～１２月の同一生徒の進歩）

① Amemiya decided to produce machines to clear landmines to help Cambodians.

↓ （最小限の情報しか盛り込まれていない）

Chirori, which has deformed leg, didn't stop hard training to be a therapy dog and completed it in only six months.

（関係代名詞を使うことにより、情報をうまくもりこめるようになった）

② Amemiya <u>came up with an idea</u> to use a hydraulic shovel and challenged to make it, first created a unique metal cutter, second make the driver's cab safe, third the maintenance would be carried out in Cambodia and it passed all the tests at home and abroad <u>with flying colors</u>.

↓ （下線部で本文の表現をそのまま利用している）

Chirori's success convinced Mr. Oki that <u>strays will help to change this sad situation</u>, because such dogs understand the patients' pain and sorrow well, and she taught many people that they should never give up on their lives

（下線部で自分の英語を使い、また because を使って複文にしている）

③ When a six-member project team was set up, Amemiya found landmine were covered by plants and Amemiya wanted a machine to cut plants.

↓　（when を使って複文にしているが、Amemiya を繰り返し使用している）

Plants can “communicate” with some insects around them in a special way, for example, they send out a chemical to attract parasitic wasps when corn plants are being eaten by caterpillars.

（一般論から各論への展開がスムーズである）

教師の変化

要約を指導するのは今回初めてだったので、指導法の知識や経験がなく、生徒の作品を見ながらその生徒に応じた指導をくりかえした。作品をポートフォリオにさせたことで、生徒の課題や改善状況を観察することができた。生徒が少しずつ進歩していく様子を見るのは喜ばしく、生徒一人ひとりに目を向けて指導することができたと思う。

今後の課題（次の改善点など）

・要約の指導について

さまざまなスタイルの英文（物語文、説明文、論説文、会話文など）の要約のしかたを指導できるように、さらに自己研さんを積む必要がある。

・文法、語法の定着

要約活動を通して、生徒たちも正確に文法を使えるようになることの必要性を感じているので、聞いたり話したりしながら文法に注意を向けさせるような活動を研究したい。

まとめ・感想

・「要約は生徒には無理だ」と最初から決めつけずに、難しいけれどもそれに取り組むことによって力がつくということを理解させたうえで、指導し続けるということが大事なことだと思った。今後も、英文を読んで要約し、感想をまとめるという活動を取り入れ、自分の考えを表現させる機会を増やしたいと思う。「書く」「話す」活動によって、ますますそれを使える段階まで引きあげていきたい

・この研修は、一緒に参加した先生方からよい刺激を受けながら、自分自身と授業を見つめ直すよい機会になった。また、丁寧に指導してくださったアカデミアの先生方の熱意にも応えるべく、今後もさらに自己研さん、授業改善に努めたいと思った。

授業改善にあたって参考にした資料等

靜哲人. (1999).『英語授業の大技・小技』研究社

樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸. (2007).『すぐれた英語授業実践』大修館書店

平成 25 年度　英語教育アドヴァンスト研修　担当講師（50 音順）

ヴァン・アメルズフォート、マルセル（VAN AMELSVOORT, Marcel）

江原　美明（えはら　よしあき）

クマザワ、ジョージ（KUMAZAWA, George）

パリセ、ピーター（PARISE, Peter）

村越　亮治（むらこし　りょうじ）

本柳　とみ子（もとやなぎ　とみこ）

平成 25 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践－

発行日　平成 26 年 3 月 31 日
編　集　神奈川県立国際言語文化アカデミア
（担当）村越 亮治　江原 美明
発　行　神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2－1
℡ 045(896)1091